

県営圃場整備事業（昭和53年度）
埋蔵文化財緊急発掘調査報告

堂前

1979

長野県上伊那郡飯島町
南信土地改良事務所

まえがき

飯島町は、昭和48年8月より全町にわたり、県営圃場整備事業を実施している。この石曾根堂前遺跡の緊急発掘調査もそれに関連して、南信土地改良事務所より委託されて、昭和53年10月11日より全年11月11日にわたり実施されたものである。

飯島地区の地形を概観すると、西は越百山、南駒ヶ岳にまで続く山地帯が約8kmにわたって広がり、山麓には、中田切川と与田切川とによって形成された扇状地とその下方に続く三段の段丘面が天竜川に面する段丘崖まで3km余り続いている。

北の駒ヶ根市との境を流れる中田切川と南の七久保地区との境を流れる与田切川とによって形成されている広大な古い扇状地は、それを更に、これらの河川とその中間を流れる郷沢川、太田ノ沢によって侵食が進められ、加えるに山地帯の隆起運動のために傾斜が急流となり開析が進んだ。そのため砂礫の流出が著しく、この土砂が山麓に堆積されて再び新しい扇状地を各地に形成している。

この石曾根堂前遺跡は、郷沢川下流と与田切川下流との間に形成された扇状地に点在する遺跡のうち、湧水、沢をひかえ、生活に好適な段丘面に展開したものと考えられる。

今回の発掘調査によって、遺跡内から、縄文時代中期住居址9軒、全土壤又は堅穴80ヶ所、平安時代住居址4軒、配石2ヶ所、鎌倉より戦国時代陶器片多数検出された。この集落が母体となり、江戸時代の石曾根村への発展とも考えられ、今後の集落研究の上に大きな成果をもたらした。

この調査を実施するにあたり、調査団を結成し、長野県教育委員会のご指導を仰ぎ、調査団長に友野良一先生、調査員に伊藤修、和田武夫両氏を依頼しこの事業を遂行しました。

最後にこの成果に対し、南信土地改良事務所を始め、県教育委員会、調査団の諸先生、石曾根、鳥居原等、地元町民の皆様に深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和54年3月20日

飯島町教育委員長

北原健三

序

飯島町においては、昭和48年より県営面積整備事業が開始され、今年度は田切地区第17工

区石曾根地籍が実施されてます。

当地籍は、町内において古くから集落が発達していた地域であり、文化財保護の立場から

飯島町遺跡調査会に依頼し、調査を行いました。

幸いにも南信土地改良事務所の御配意と、県教育委員会文化課の御指導の下、優秀なる調

査団の先生方により大きな成果をあげられたことは、感謝にたえません。

出土品については、飯島町陣頭館に展示し一般の方々に見ていただく予定です。

調査報告書の刊行に当って関係各位に対し心から謝意を捧げる次第であります。

昭和54年3月26日

飯島町教育委員会教育長

熊崎安二

凡 例

1. この調査は、県営圃場整備事業に伴なう緊急発掘調査で、調査は南信土地改良事務所の委託により、飯島町が実施した。
2. 本調査は、53年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述はできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
3. 本報告書の執筆者は次の通りである。

友野良一、伊藤 修、河野昌永

報告書整理作業

河野昌永、横田愛子、宮下きくゑ

4. 本報告書の編集は、主として飯島町遺跡調査会があたった。

目 次

まえがき

序

凡 例

目 次

挿図目次

表・図版目次

第Ⅰ章 環 境	1
第1節 位 置	1
第2節 地形・地質	3
第3節 歴史的環境	3
第Ⅱ章 発掘調査の経過	4
第1節 発掘調査に至るまで	4
第2節 調査日誌	5
第Ⅲ章 遺構・遺物	6
第1節 縄文時代の遺構	7
第2節 平安時代の遺構	8
第3節 その他の遺構	9
第Ⅳ章 まとめ	10

図 版

挿 図 目 次

第1図 位置図	1
第2図 地形図(1:2000)	2
第3図 遺構配置図(1:600)	6
第4図 第2号住居址(1:60)	8
第5図 第2号住居址出土土器(1:3)	8
第6図 第2号住居址土器(1:3)	9
第7図 第2号住居址石器実測図(1:4)	10
第8図 第3号住居址(1:60)	12
第9図 第3号住居址出土土器(1:3)	12
第10図 第3号住居址土器(1:3)	13
第11図 第3号住居址石器実測図(1:4, 石錐1:2)	14
第12図 第4号住居址(1:60)	16
第13図 第4号住居址出土土器(1・1:5.2・4・1:3)	16
第14図 第4号住居址土器(1:3)	17
第15図 第4号住居址石器実測図(1:4)	18
第16図 第5号住居址(1:60)	20
第17図 第5号住居址出土遺物(1・1:3.2・1:4)	20
第18図 第5号住居址土器(1:3)	21
第19図 第5号住居址石器実測図(1:4)	22
第20図 第6号住居址(1:60)	24
第21図 第6号住居址出土土器(1・1:6.2・1:5)	24
第22図 第6号住居址土器(1:3)	25
第23図 第6号住居址石器実測図(1:4)	26
第24図 第9号住居址(1:60)	28
第25図 第9号住居址出土土器(1:5)	28
第26図 第9号住居址土器(1:3.1・2・1:5)	29
第27図 第9号住居址石器実測図(1:4)	30
第28図 第12号住居址(1:60)	32
第29図 第12号住居址土器(1:3)	33

第30図 第12号住居址石器実測図 (1:4)	33
第31図 第10号住居址土器 (1:3.1・1:5)	34
第32図 第10号住居址石器実測図 (1:4.8・1:3)	34
第33図 配石 (1:60)	36
第34図 配石出土土器 (1:3)	36
第35図 配石出土石器実測図 (1:4)	36
第36図 土壇平面図・南地区 (1:120)	37
第37図 土壇平面図・北地区 (1:120)	38
第38図 その他土器 (1~4 1:6, その他1:3)	39
第39図 その他土器 (1:3)	40
第40図 その他石器実測図 (1:4)	41
第41図 その他石器実測図 (1:4.21~24 1:3.25 1:6)	42
第42図 第1号住居址 (1:60)	44
第43図 カマド部分	44
第44図 第1号住居址出土土器・鉄製品 (1:3)	44
第45図 第7号住居址 (1:60)	46
第46図 第7号住居址カマド (1:60)	46
第47図 第7号住居址土器 (1:3)	47
第48図 第7号住居址土器 (1:3)	48
第49図 第8号住居址 (1:60)	50
第50図 第8号住居址カマド (1:60)	50
第51図 第8号住居址土器 (1:3)	51
第52図 第8号住居址土器 (1:3)	52
第53図 第13号住居址 (1:60)	53
第54図 第13号住居址 (1:3)	54
第55図 第1号竪穴 (1:60)	55
第56図 列石 (1:120)	57

表・図版目次

表1 第2号住居址出土遺物	7
表2 第3号住居址出土遺物	14
表3 第4号住居址出土遺物	18
表4 第5号住居址出土遺物	22
表5 第6号住居址出土遺物	26
表6 第9号住居址出土遺物	30
P1 第2号住居址	7
P2 第3号住居址	11
P3 第4号住居址	15
P4 第5号住居址	19
P5 第6号住居址	23
P6 第9号住居址	27
P7 第12号住居址	31
P8 配石	35
P9 第1号住居址	43
P10 第7号住居址	45
P11 第8号住居址	49
P12 第1号竪穴	56
P13 列石	57



遺跡航空写真

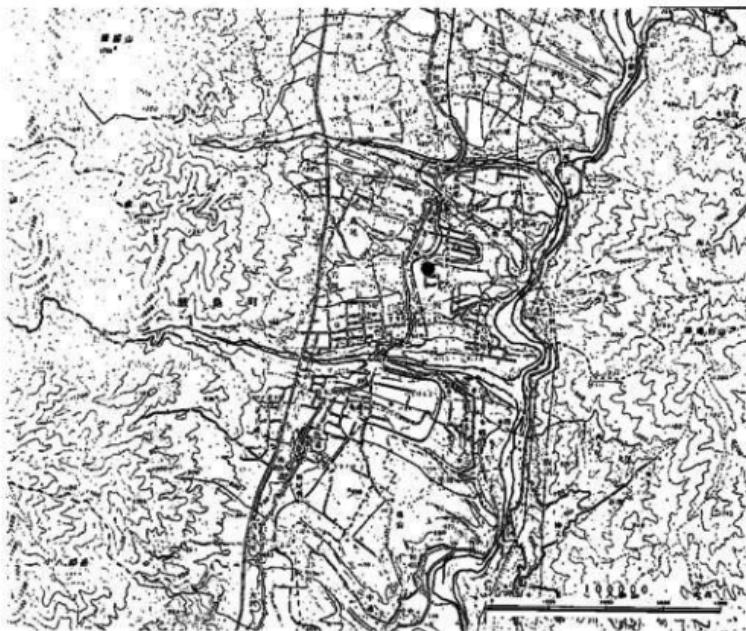
第Ⅰ章 環 境

第Ⅰ節 位 置

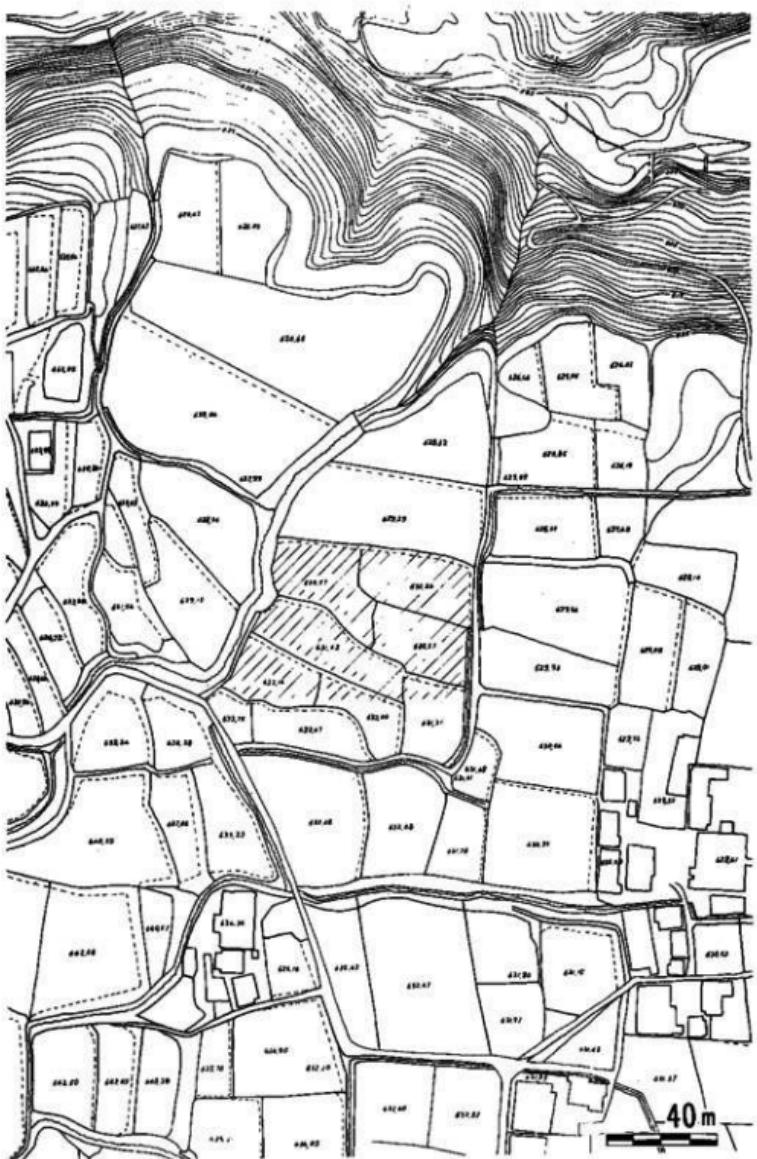
當前遺跡は長野県上伊那郡飯島町大字飯島石曾根地籍に所在する。

遺跡は飯島地区の北東部に位置しており、伊那谷独特の河岸段丘の扇尖部にあたる。遺跡に至るには、国鉄飯田線飯島駅で下車し鉄道沿いに北へ約500mほど歩き、さらに東へ約200mほど歩く。国道153号線からは東へ約300mほどの所である。

遺跡の北側は、郷沢川の段丘端となっており、比高は約40mをはかる。遺跡の中心で標高は632mである。



第1図 位 置 図



第2図 地形図 (1:2000)

第2節 地形・地質

木曾山脈と赤石山脈に挟まれた伊那谷は、一口に南北に細長い縱谷状地形といえる。この中央部を天竜川が南流し、天竜川に向かって西の木曾山脈、東の赤石山脈に源を発する中小河川が流れ込んでいる。これらの中小河川は山麓にいくつもの扇状地を形成したが、その後の隆起運動により、これらの扇状地を自ら浸食していった。

飯島町は伊那谷のそれと同様、中田切川、与田切川、日向沢川等の中小河川の浸食、堆積作用により扇状地が発達しており、堂前遺跡は、中田切川、与田切川に挟まれた扇状地の扇央部に位置している。

堂前遺跡のある石曾根耕地は、扇状地の扇央部といつても、地形を注意深く観察してみれば、北側が郷沢川の深い河岸段丘端となり、南側はなだらかな傾斜地となっており、東西にのびた広い丘陵地ともいえる。遺跡は、この丘陵地の中央部より、やや北側の段丘端によったところに位置している。

調査地区的土層については、遺跡地付近が古くからの水田地帯であり遺構を破壊している為明らかでないが、おおよそローム層、褐色土層、黒褐色土層、黒土層の順で堆積していくと思われる。表土よりローム層までは、50~60cmをはかる。遺構はローム層を掘り込んで造られており、遺物は主に耕作土層下部あるいは黒褐色土層より出土した。

第3節 歴史的環境

堂前遺跡を除いて、石曾根耕地には原始、古代の遺跡は確認されていない。しかし中世以後、生活立地にかなった地形よりみて集落が発達していたと考えられる。石曾根耕地の東、天竜川と郷沢川の合流する河岸段丘の先端には、中世の唐沢城址があり、唐沢氏や飯島氏などのこの地方の豪族とも関係が深い土地と思われる。現在の飯島町の前身は石曾根村といいこれからみても古くより集落が発達していたことがうかがわれる。

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

県営圓場整備事業田切地区第工区にある堂前遺跡の埋蔵文化財緊急発掘調査を飯島町では、飯島町遺跡調査会に委託し実施した。

飯島町遺跡調査会

会長	熊崎 安二	(教 育 長)
理事	片桐 修	(飯島町文化財調査委員)
	宮下 静男	(タ)
	北原 健三	(タ)
	桃沢 匠行	(タ)
	松崎 研定	(タ)
	中島 敏雄	(タ)
	片桐 佳彦	(タ)
監事	堀越 清志	(飯島町監査委員)
	中野 武司	(タ)
幹事	吉沢 内次	(飯島町教育委員会教育次長)
	伊藤 修	(飯島町教育委員会主事)
	宮下 淑江	(タ)

発掘調査団

団長	友野 良一	(日本考古学協会員)
調査員	伊藤 修	(飯島町教育委員会主事)
	和田 武夫	(長野県考古学会員)
調査補助員	河野 昌永	(飯 島 町)
整理作業員	横田 愛子	(タ)
	宮下 きくゑ	(タ)

第2節 調査日誌

調査における主だった項目を調査の進行にそって拾ってみたい。

- 調査は、調査地区全体に2m四方のグリットを設定し行なった。
- 遺跡の南西より調査を行なう。縄文時代後期の遺物が相当量出土した為、ていねいにグリット掘を行なう。黒褐色土層の下部でグリット掘をとめ、付近一帯を拡張する。
- 調査地区北側より縄文時代中期、平安時代の住居址が確認されたので、縄文時代、平安時代の複合集落址と考える。
- 調査地区西側中央部より列石、配石、平安時代の住居址が確認される。
- 調査地区東側へ移る。縄文時代後期の遺物は少なく、遺構も確認されないため、ブルトーラーにより表土剥ぎを行ない住居址の確認を中心とした調査にきりかえる。
- 縄文時代後期の遺物は、調査地区的南西に集中していることが確認される。
- 調査地区的東側より縄文時代中期、平安時代の住居址が確認される。遺物の出土量が多いため、全面発掘する。竪穴、土墻が多数検出される。
- 遺跡の北端、東端地区的グリット掘を行なう。遺物の出土量が少なく、また小破片であり遺構も検出されないため、この地区的調査をうちきる。
- 遺物について、主要なものは平面図に出土点、出土高等を記録した。
- 遺構については、平面図の他にできる限り遺構断面の土層についても記録を行なった。

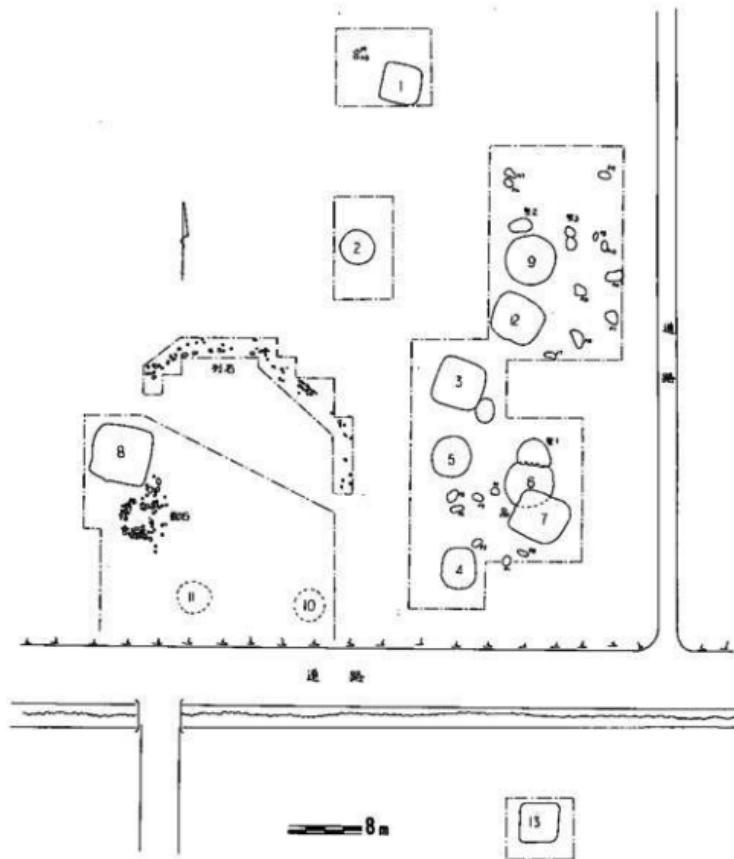
（参加者名簿）

大沢閑次郎、大沢 操、唐沢政治、唐沢千明、北沢政広、吉川貞男、佐々木林蔵、中上 茂、中原利雄、福島兼作、星野一雄、堀田 一、堀内金一、宮下静男、桃沢義高、米山昌富、市村寿子、大沢多喜子、唐沢明子、唐沢かね子、唐沢 栄、唐沢千代子、唐沢百江、北原温美、北原徳子、堀本いせ、中上みつよ、野原くにゑ、堀内とし子、堀内ゆきゑ、三浦ますゑ、三石千代、三石ふさ子、宮下きくえ、宮下喜代子、横田愛子

第Ⅲ章 遺構

今回の調査で、縄文時代中期の住居址9箇所、平安時代の住居址4箇所、竪穴3箇所、土壠約100箇所、配石、列石各1箇所の遺構が検出された。

調査地区一帯は、水田の造成時に相当破壊されており、この他に確認できなかった遺構があったものと思われる。



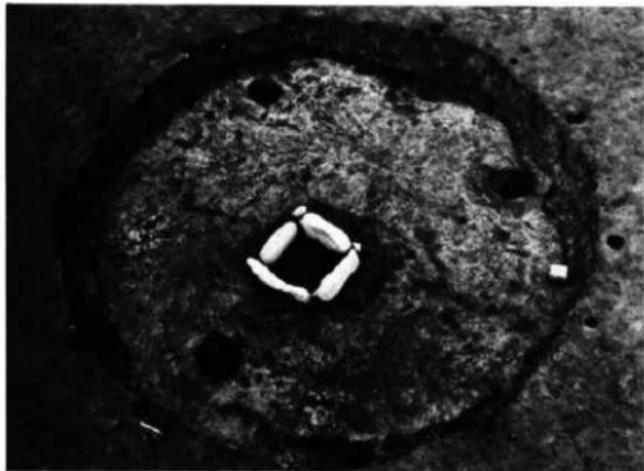
第3図 遺構配置図 (1:600)

第1節 銀文時代の造構

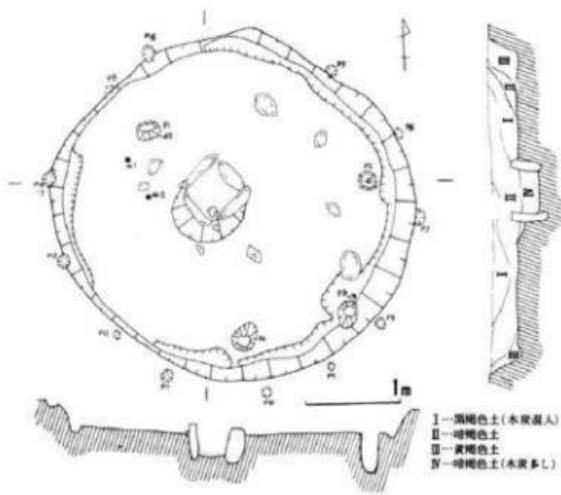
1. 住居址

第2号住居址

本址位置	調査地区中央部やや北側				
プラン	円形	規模	南北—3.5m 東西—3.5m	主軸方向	
標高	南 30cm 東 25cm	北 25cm 西 25cm	壁の状態	やや傾斜がみられる	
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦で堅緻である。 保存状態は非常に良い。				
周溝	巾10cm～15cm、深さ5cm～10cm、西北の壁部分には周溝は認められない。				
柱穴	15箇所	主柱穴	P ₁ P ₂ P ₃ P ₄	壁外柱穴	12箇所
炉の位置	中央部や西側	形状	石 四 炉	規模	60cm方形
壁外施設	確認されない。				
遺物出土状況	比較的少ない。				



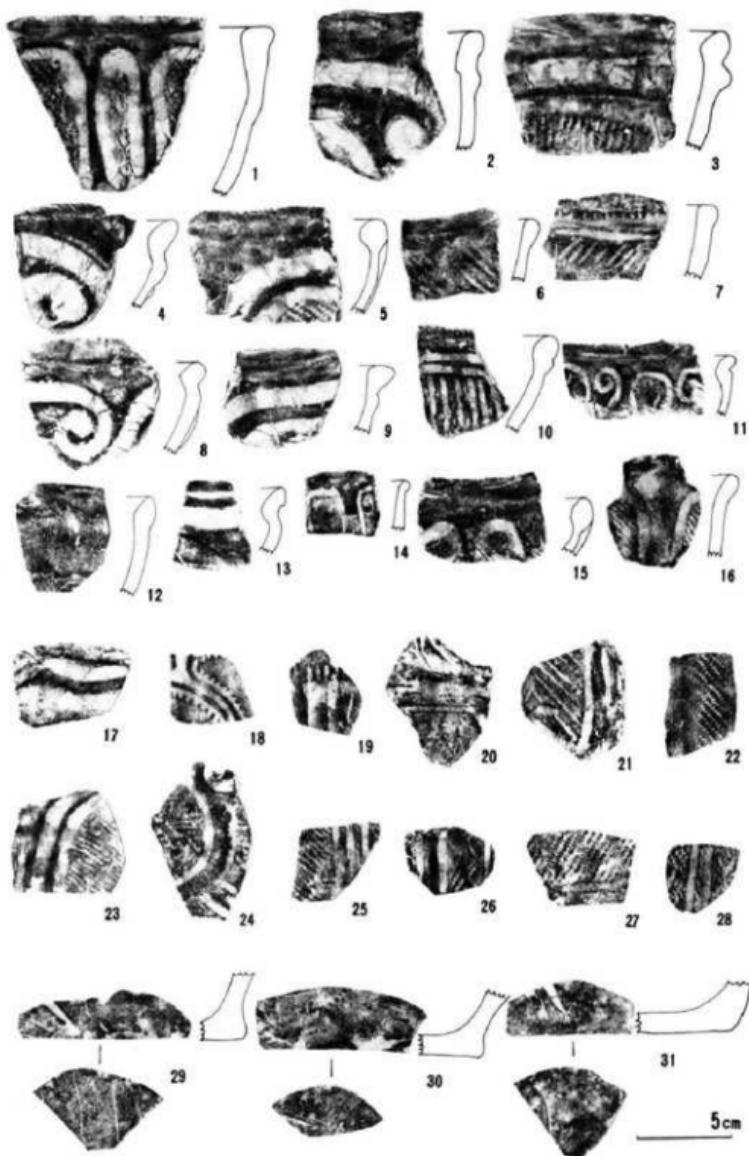
P 1 第2号住居址



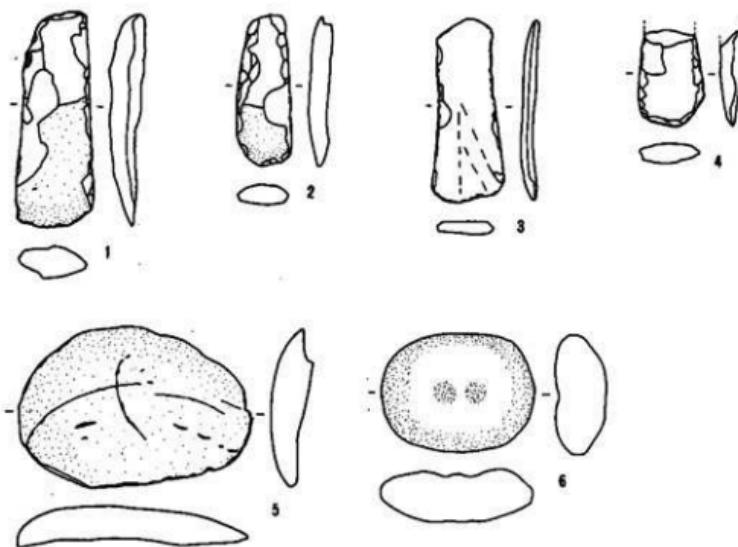
第4図 第2号住居址 (1:60)



第5図 第2号住居址出土土器 (1:3)



第6図 第2号住居址土器(1:3)



第7図 第2号住居址石器実測図(1:4)

番号	掲図番号	分類	器種	部位	材質	色調	胎土	時代	備考
1	第5図 1	土器	塑形土器	口縁部		赤褐色	粗砂粒	縄文中期	
2	第5図 2	土器	塑形土器	腹部		赤褐色	粗砂粒粒雲母含有	縄文中期	
3	第7図 6	石器	凹石		砂岩			縄文中期	

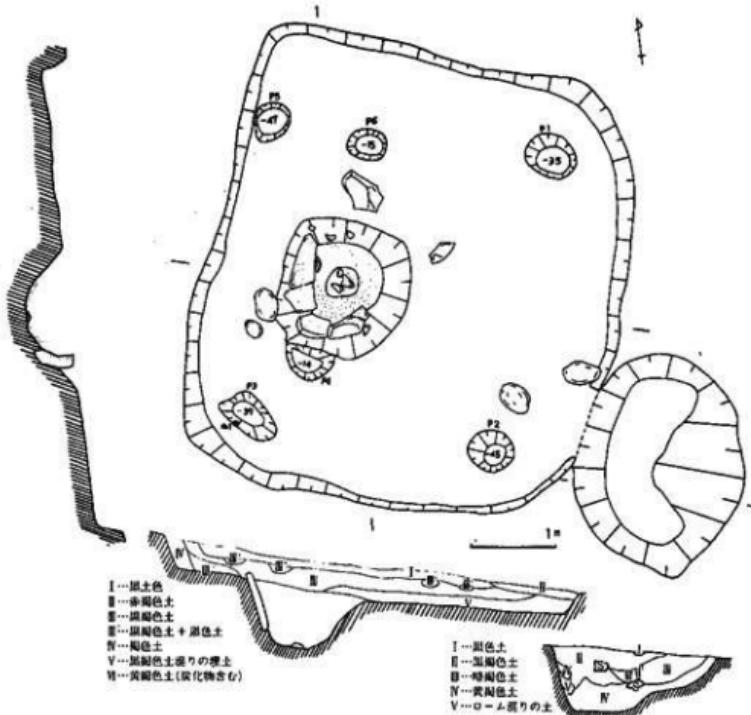
表1 第2号住居址出土遺物

第3号住居址

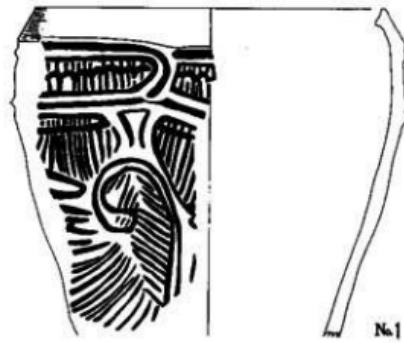
本 坂 位 置	調査地区中央東側。第5号住居址の北側、第12号住居址の南西側。						
ア ラ ン	隅丸方形	規 模	南北—5.3m 東西—4.8m	主軸方向			
壁 高	南 30cm 東 45cm	北 30cm 西 35cm	壁の状態	やや傾斜がみられる。			
床	ローム層を振り込んで造られている。床面は平坦で堅硬であるが、中央部がやや軟弱である。						
周 溝	認められなかった。						
柱 穴	4ヶ	主柱内	P ₁ , P ₂ , P ₃ , P ₄				
炉 の 位 置	西側中央付近	形 式	石 囲 炉	規 模	1m×1m 大形		
土 壁 外 施 設							
そ の 他							
遺物出土状況	覆土下層よりの出土が多い。						



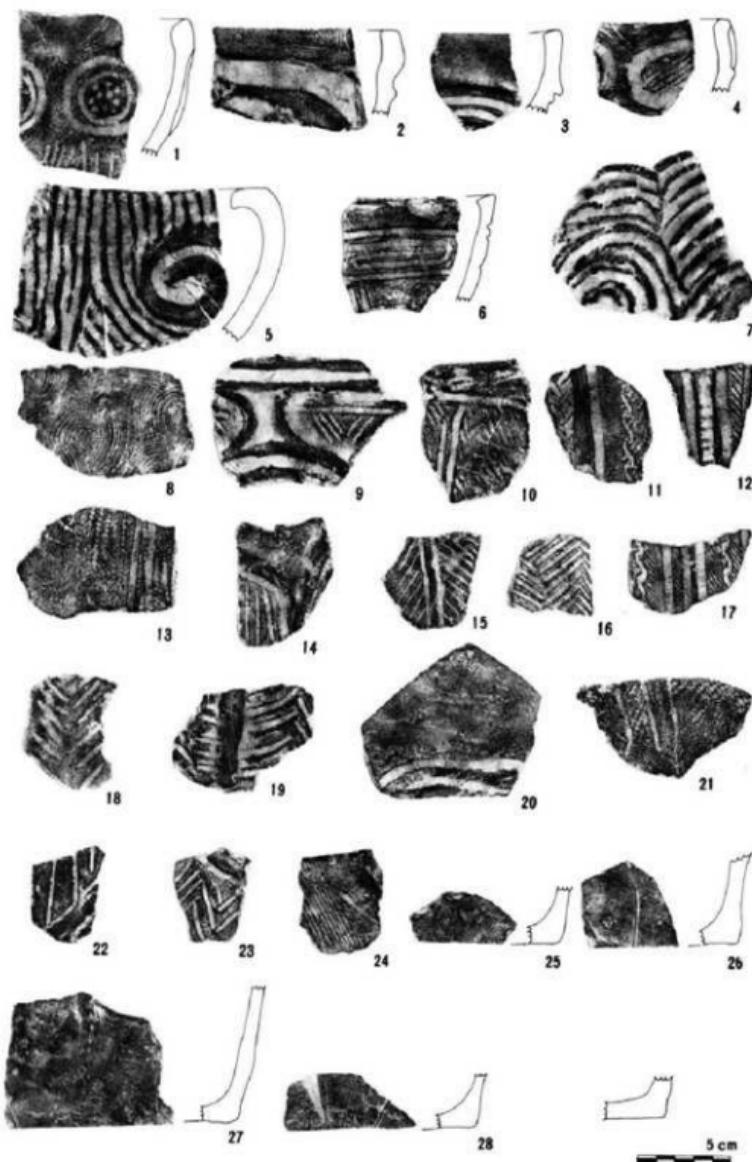
P 2 第3号住居址



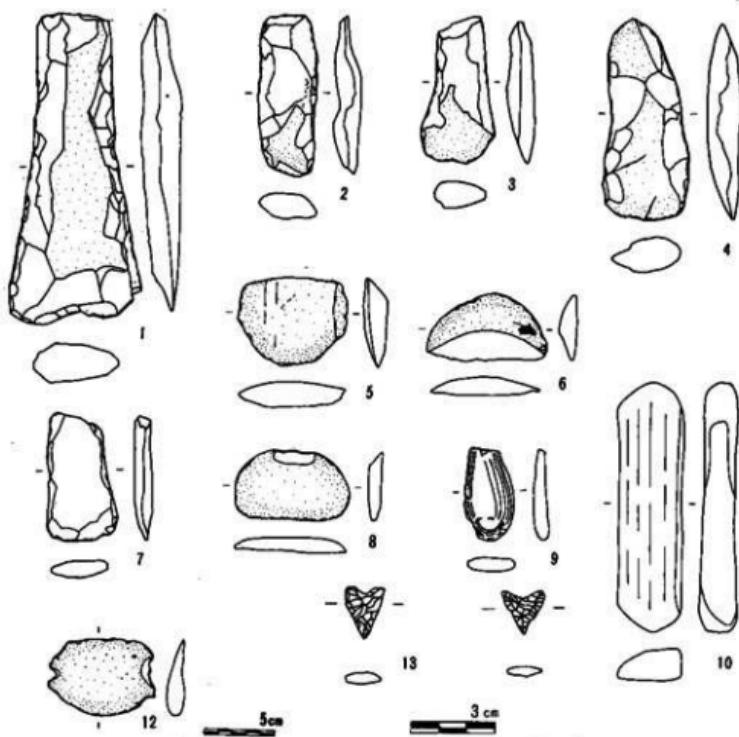
第8図 第3号住居址 (1:60)



第9図 第3号住居址出土土器 (1:60)



第10図 第3号住居址土器 (1:3)



第11図 第3号住居址石器実測図 (1:4, 石錐1:2)

番号	挿図番号	分類	器種	部位	材質	色調	胎土	時代	備考
1	第9図	土器	變形土器	口 縫 脣 部		赤褐色	粗砂粒含	縄文中期	
2	第11図 1	石器	打製石斧		硬砂岩				大形

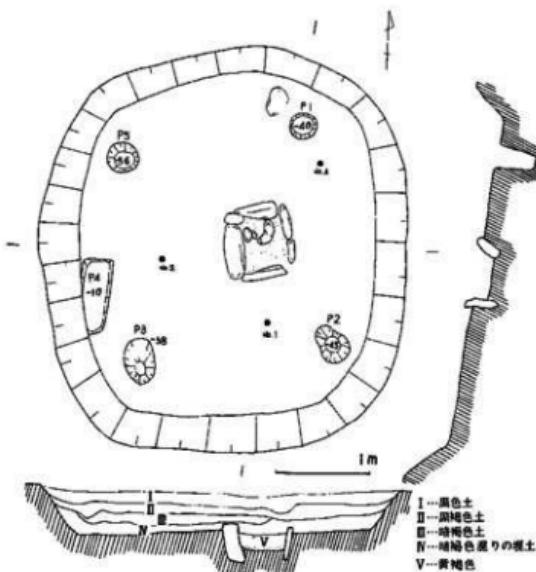
表2 第3号住居址出土遺物

第4号住居址

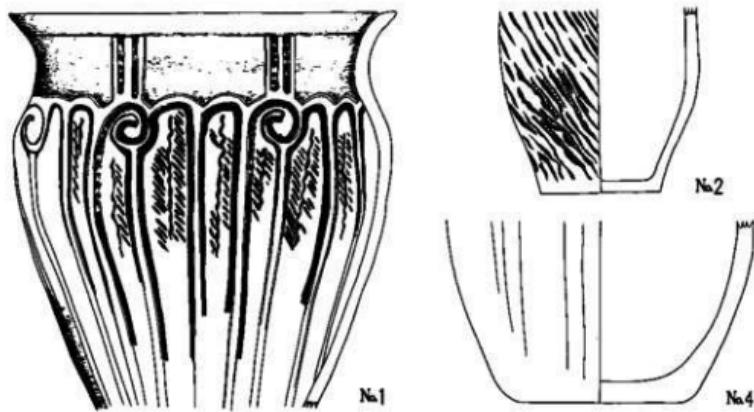
本 坂 位 置	第5号住居址の南側に位置する。						
ア ラ ン	円 形	規 模	南北—4m 東西—3.8m	主軸方向			
壁 高	南—40cm 東—40cm	北—35cm 西—50cm	壁の状態	なだらかな傾斜がある。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。保存状態は良く、床面は平坦で非常に硬い。						
周 溝	認められない。						
柱 穴	4箇所	主柱穴	P ₁ , P ₂ , P ₃ , P ₄ , P ₅				
炉 の 位 置	中央部やや東側	形 式	石 四 炉	規 模	0.8m×0.7m		
壁外施設 そ の 他							
遺物出土状況	覆土中層からの遺物の出土が非常に多い。						



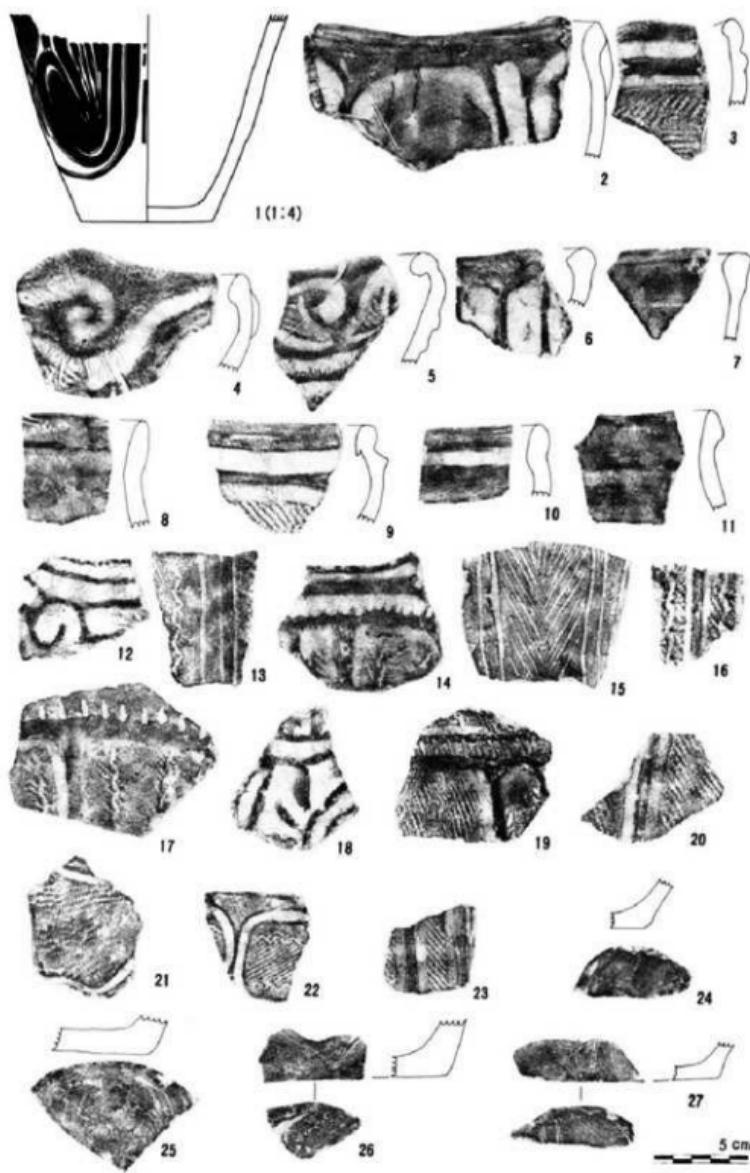
P 3 第4号住居址



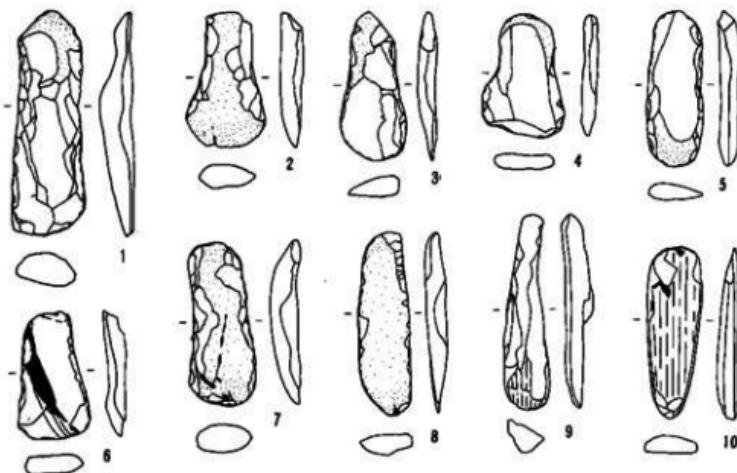
第12図 第4号住居址 (1:60)



第13図 第4号住居址出土土器
(1・1:5.2・4・1:3)



第14図 第4号住居址土器 (1:3)



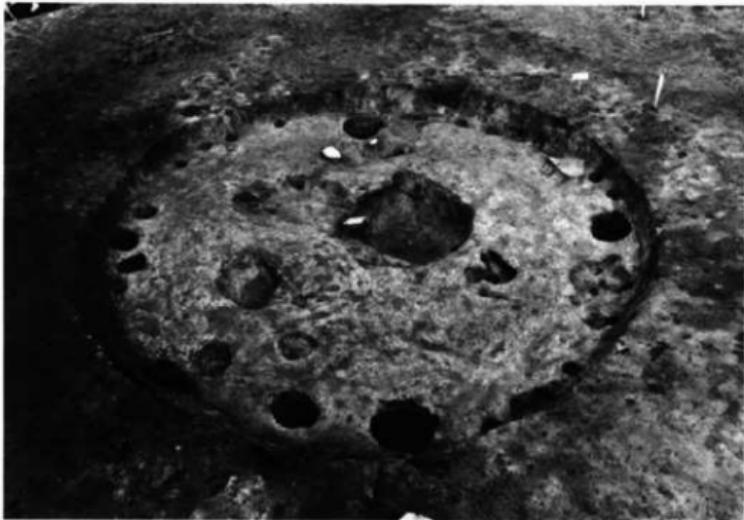
第15図 第4号住居址石器実測図 (1:4)

番号	鉢図番号	分類	器種	部位	材質	色調	胎土	時代	備考
1	第13図 1	土器	変形土器	口縁・胴部		灰褐色	砂粒含	縄文中期	
2	第13図 2	土器		胴部・底部		赤褐色	粗砂粒多	縄文中期	
3	第13図 4	土器	変形土器	底 部		赤褐色	粗砂粒多	縄文中期	
4	第14図 1	土器	変形土器	胴部底部		赤褐色	粗砂粒多	縄文中期	

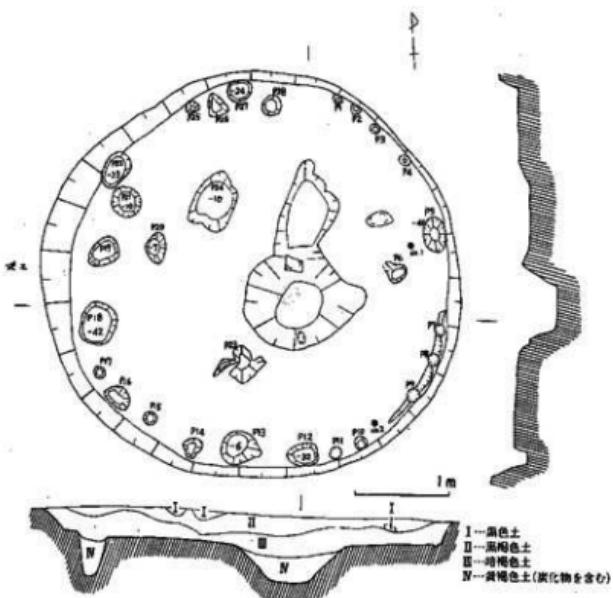
表3 第4号住居址出土遺物

第5号住居址

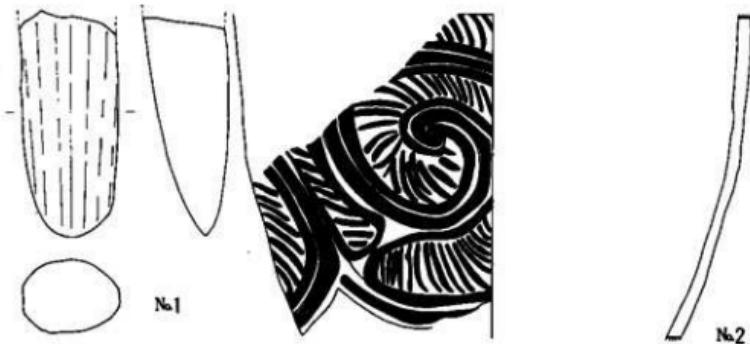
本 址 位 置		第3号住居址の南。第6号住居址の西側。			
ア ラ ン	円 形	規 模	直 径 4.2m	主 軸 方 向	
壁 高	南-30cm 東-25cm	北-10cm 西-20cm	壁の状態	東側は直に近く、西側は傾斜がある。	
床	ローム層を掘り込んで造られており、比較的平坦で堅緻である。床面には数多くのピットが確認された。特に壁付近にピットが多い。				
周 溝	南東の壁の付近にわずかにみられる。				
柱 穴	28箇所	主 柱 穴	P ₆ , P ₁₂ , P ₁₈ , P ₂₇		
扉 の 位 置	中央部や東側	形 式	扉石と思われる石が1個残ってい。	規 模	1.0m×1.2m
壁 外 施 設 そ の 他					
遺 物 出 土 状 況	覆土よりの遺物の出土が多い。				



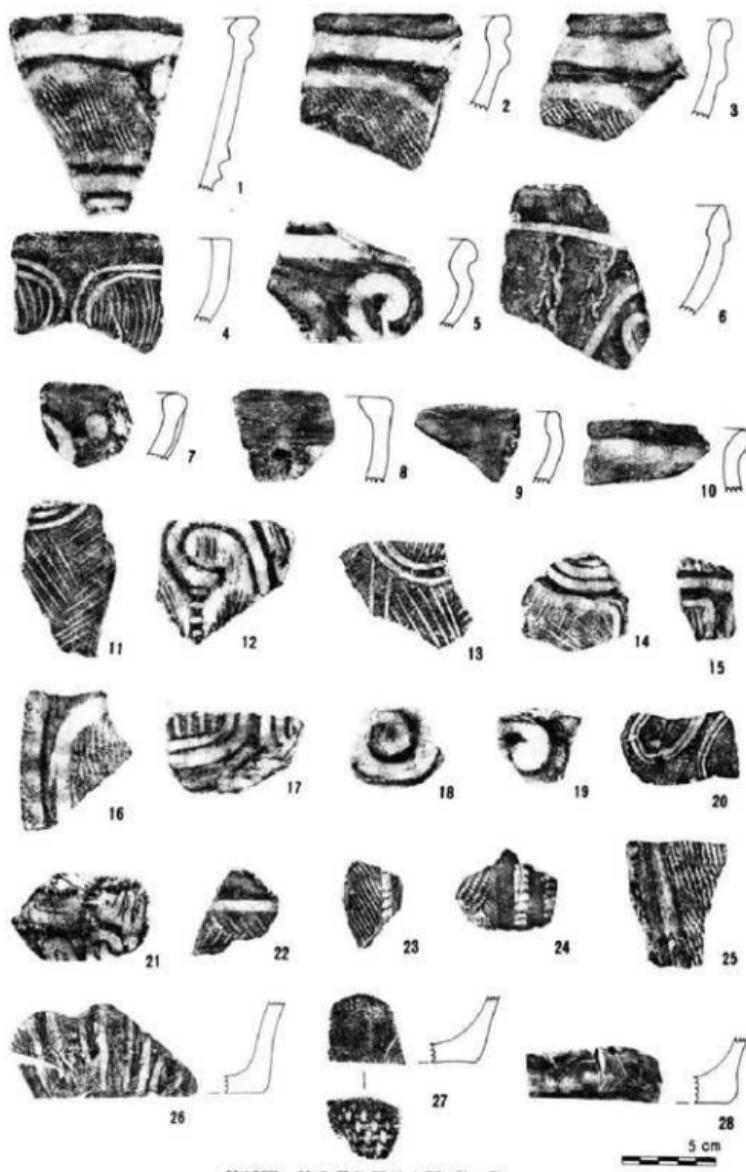
P 4 第5号住居址



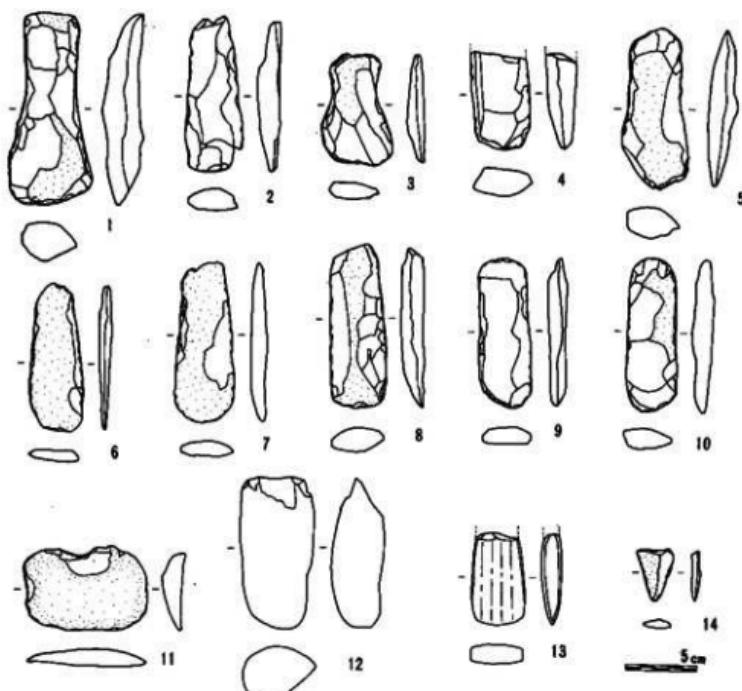
第16図 第5号住居址 (1:60)



第17図 第5号住居址出土遺物 (1・1:3.2・1:4)



第18図 第5号住居址土器 (1:3)



第19図 第5号住居址石器実測図 (1:4)

番号	掲図番号	分類	器種	部位	材質	色調	胎土	時代	備考
1	第17図 1	石器	磨製石斧		綠泥岩	綠			床面出土
2	第17図 2	土器	整形土器	胴部		黃褐色	粗砂粒含	縄文中期	

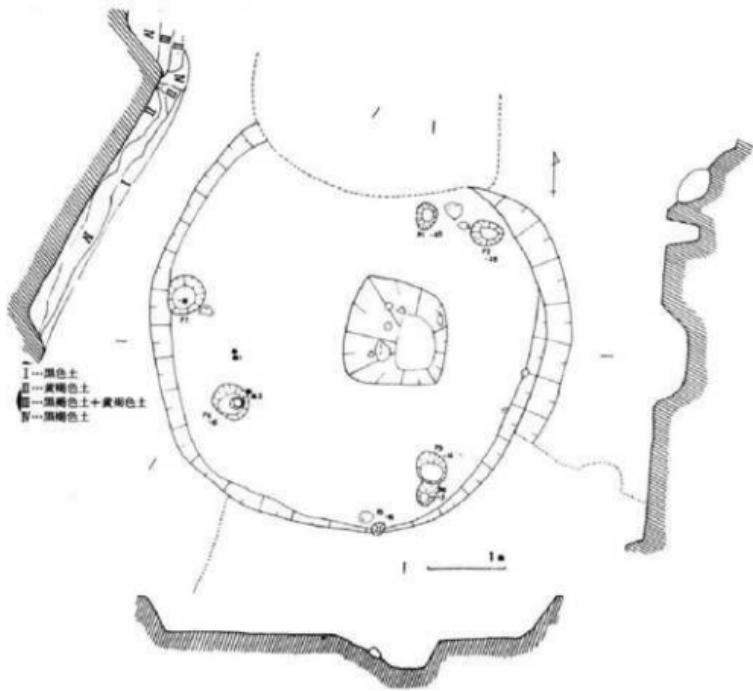
表4 第5号住居址出土遺物

第6号住居址

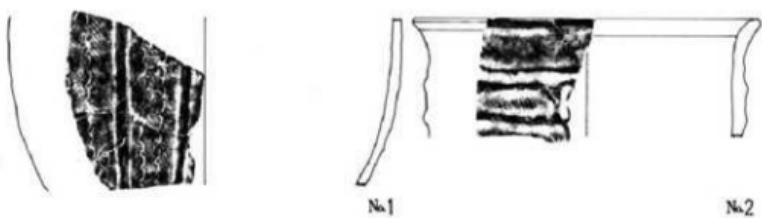
本 坂 位 置	調査地区南東、第7号住居址の北側。						
ア ラ ン	円 形	規 模	南北—5.5m 東西—5.5m	主軸方向			
壁 高	南—20cm 東—50cm	北— 西—40cm	壁の状態	なだらかな傾斜がみられる。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。平坦ではあるが軟弱である。						
周 構	確認されない。						
柱 穴	7箇所	主 柱 穴	P ₁ , P ₂ , P ₃ , P ₆ , P ₇				
炉 の 位 置	中央やや東側	形 状	石窯跡であったと思われる。	規 模	1.3m方形		
壁 外 施 設							
そ の 他	第7号住居址と窓穴により切られている。						
遺物出土状況	覆土より遺物の出土が非常に多い。						



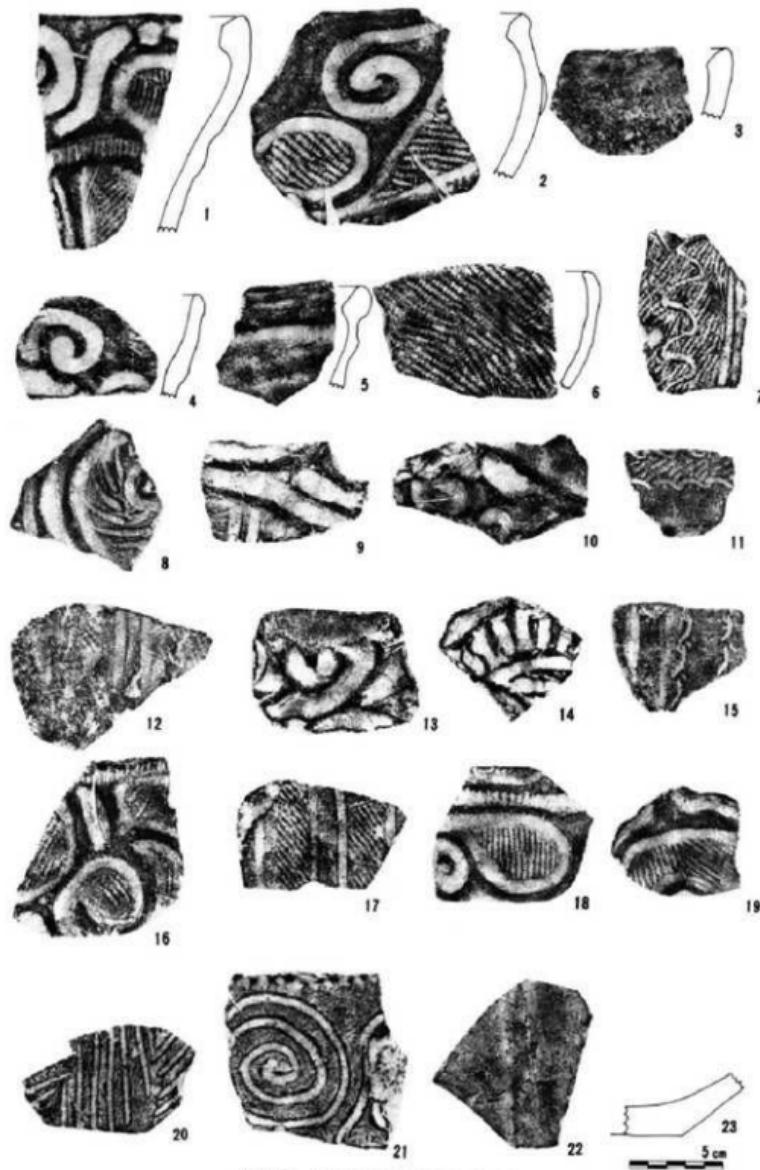
P 5 第6号住居址



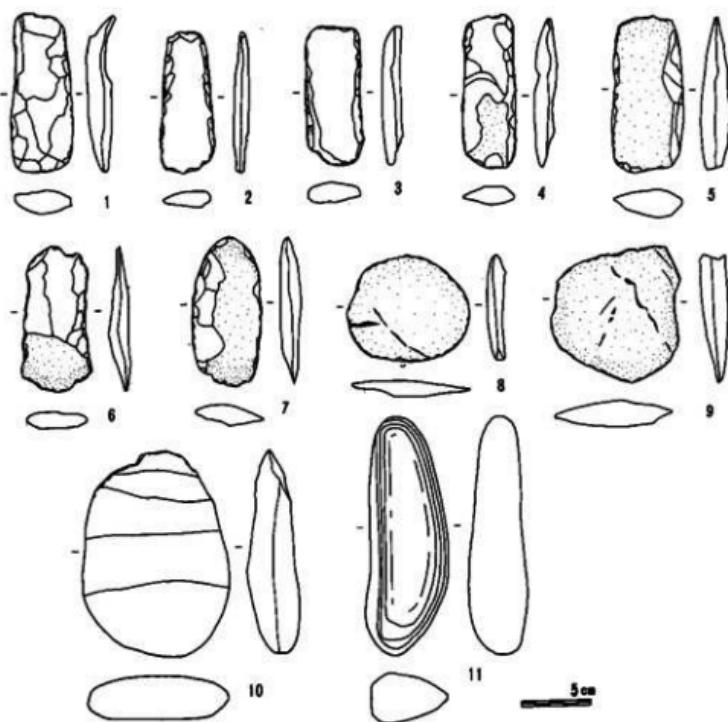
第20図 第6号住居址 (1:60)



第21図 第6号住居址出土土器 (1・1:6.2・1:5)



第22図 第6号住居址土器 (1:3)



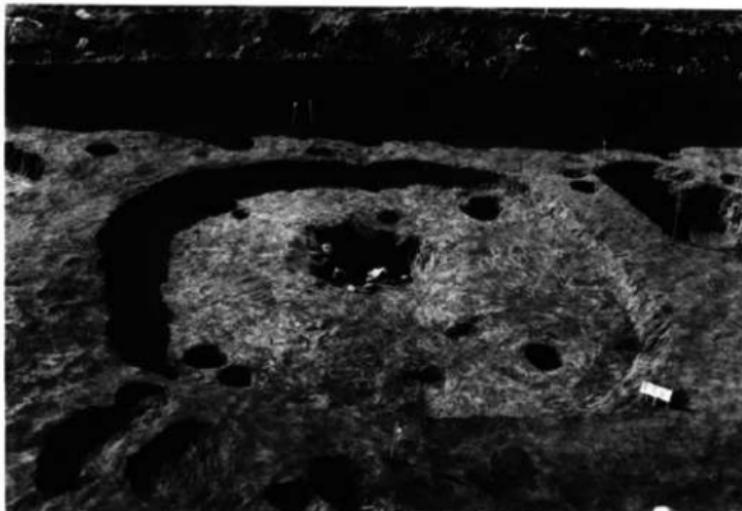
第23図 第6号住居址石器実測図(1:4)

番号	挿図番号	分類	器種	部位	材質	色調	胎土	時代	備考
1	第21図 1	土器	變形土器	剣部		灰褐色	砂粒多	縄文中期	
2	第21図 2	土器	變形土器	口縁部		赤褐色		縄文中期	

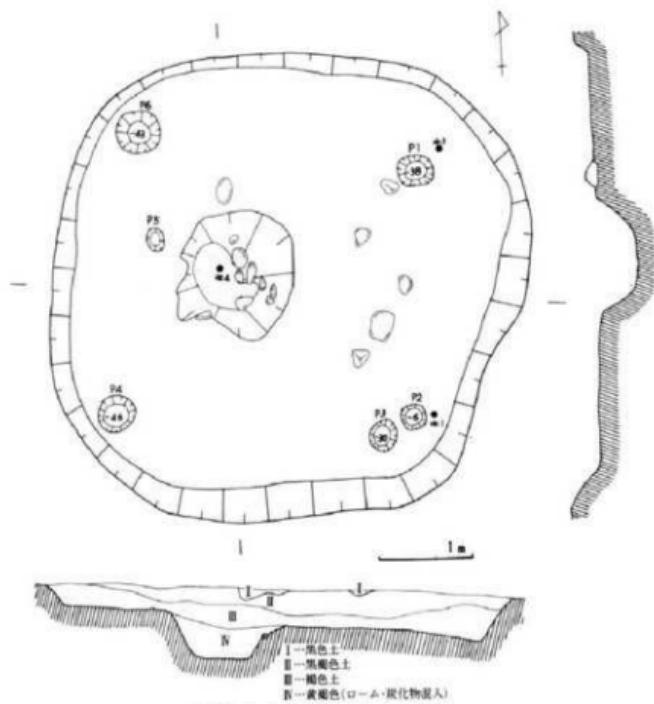
表5 第6号住居址出土遺物

第9号住居址

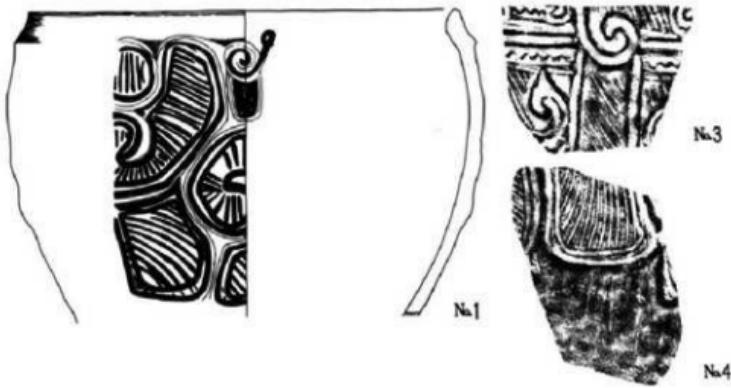
本 坂 位 置	調査地区北東端、第12号住居址の北側に位置する。						
ア ラ ン	圓 丸 方 形	規 模	南北—4.8m 東西—5 m	主軸方向			
壁 高	南—30cm 東—50cm	北—20cm 西—20cm	壁の状態	南側は、ゆるやかな傾斜がみられる。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。平坦ではあるが敷石である。						
周 溝	認められない。						
柱 穴	6箇所	主 柱 穴	P ₁ , P ₃ , P ₄ , P ₆				
炉 の 位 置	中央やや西側	形 状	石窯炉と思われる。	規 模	1.2m方形		
壁 外 施 設							
そ の 他							
遺 物 出 土 状 況	覆土よりの遺物の出土が多い。						



P 6 第9号住居址



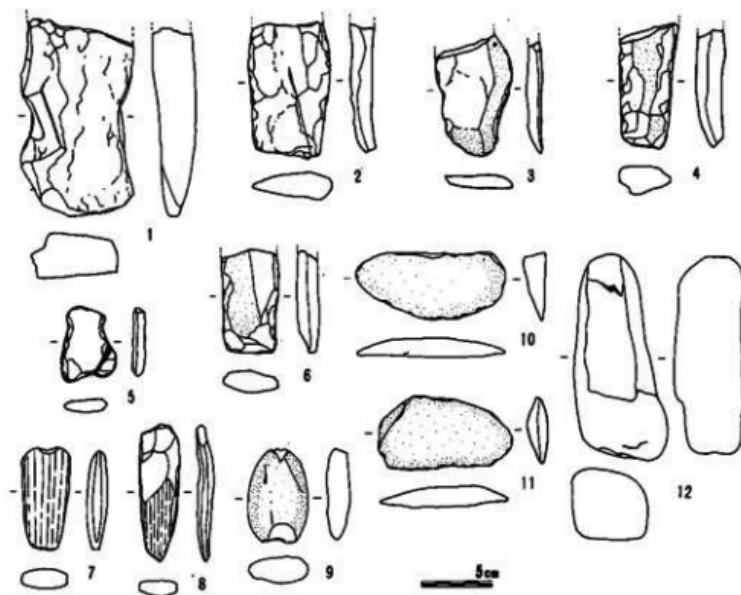
第24図 第9号住居址 (1:60)



第25図 第9号住居址出土土器 (1:5)



第26図 第9号住居址土器 (1:3, 1・2・1:5)



第27図 第9号住居址石器実測図 (1:4)

番号	鉢図番号	分類	器種	部位	材質	色調	胎土	時代	備考
1	第25図 1	土器	變形土器	口縁部 肩部		黄褐色	雲母含・砂粒含	縄文中期	
2	第25図 3	土器	變形土器	肩部		赤褐色	砂粒含	縄文中期	
3	第25図 4	土器	變形土器	肩部		黄褐色	雲母含・砂粒含	縄文中期	
4	第26図 1	土器	變形土器	口縁部 肩部		赤褐色		縄文中期	
5	第26図 2	土器	變形土器	口縁部		暗褐色	粗砂粒	縄文中期	

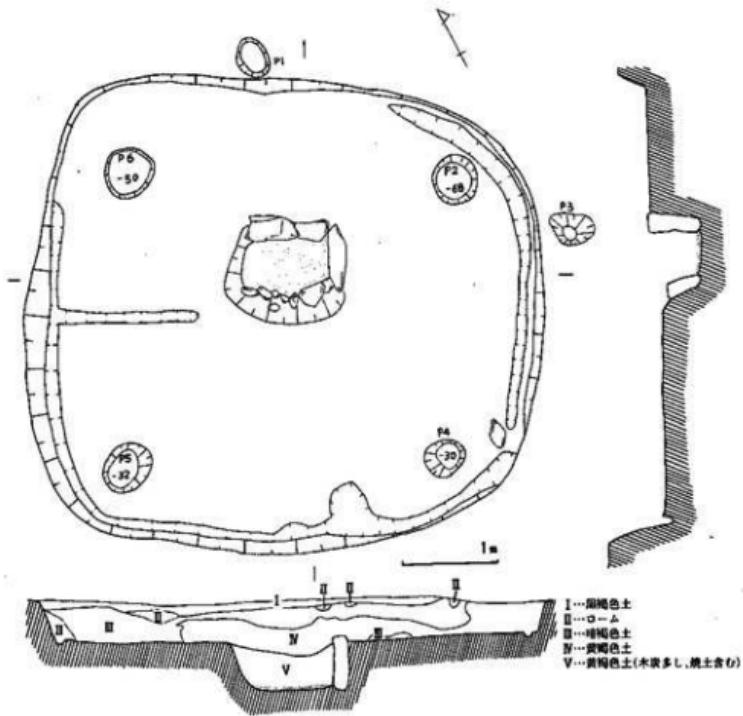
表6 第9号住居址出土遺物

第12号住居址

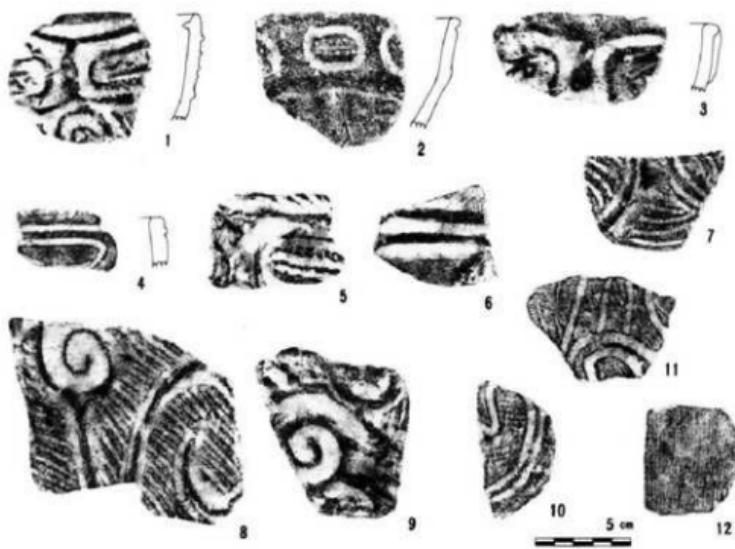
本 坂 位 置	第9号住居址の南側に位置する。				
ブ ラ ン	隅丸方形	規 模	南北—4.9m 東西—5.3m	主軸方向	
壁 高	南—60cm 東—30cm	北—30cm 西—45cm	壁の状態	直に近い	
床	ローム層を振り込んで造られている。平坦でやや陥没である。				
周 溝	巾10cm~20cm(一部50cm)、深さ5cm~10cm、北壁部分には凹溝は確認されなかった。				
柱 穴	4箇所	主柱穴	P ₂ , P ₄ , P ₅ , P ₆		
炉 の 位 置	中央部や北側	形 状	石隠炉(砾石が一部ない)	規 模	0.8m×1mの方形
壁 外 施 設					
そ の 他					
遺物出土状況	遺物の出土は、比較的少ない。				



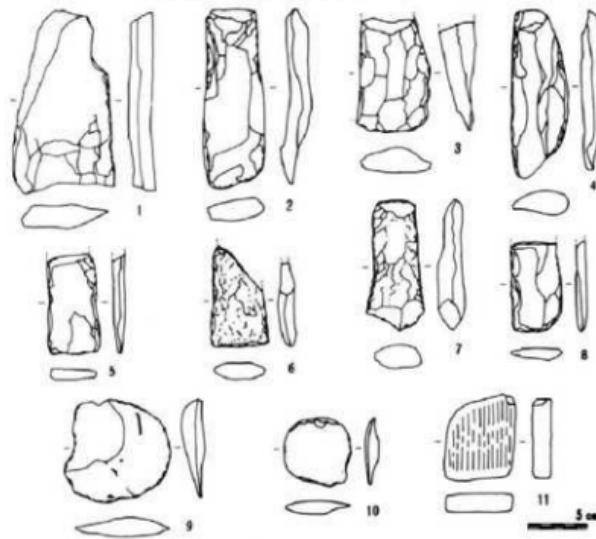
P 7 第12号住居址



第28図 第12号住居址 (1:60)



第29図 第12号住居址土器 (1:3)



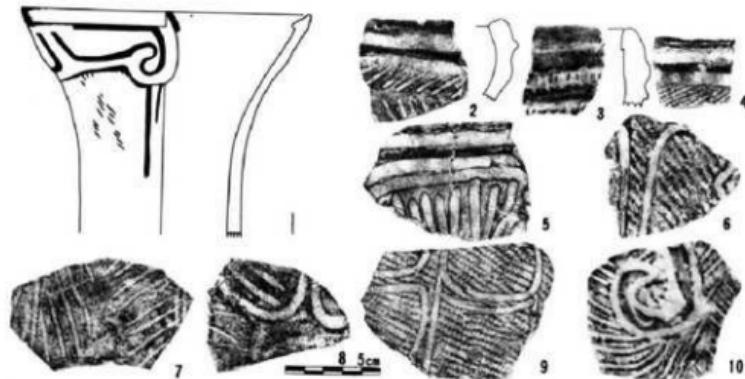
第30図 第12号住居址石器実測図 (1:4)

第10号住居址

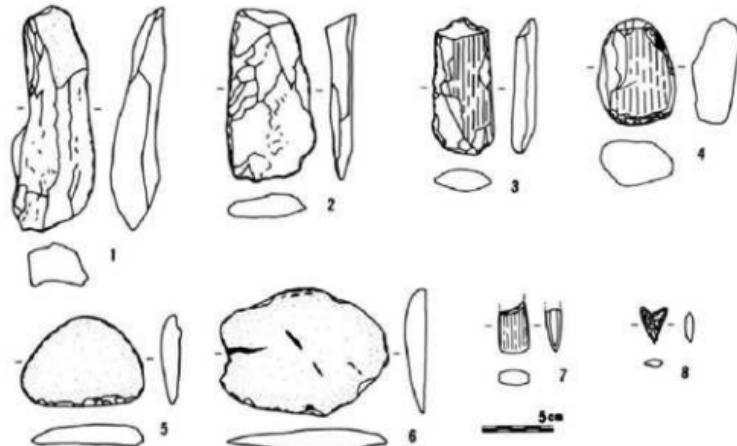
工事中に確認された。遺構の輪郭の確認と遺物の採集を行なった。

第11号住居址

工事中に確認された。遺構の輪郭の確認と遺物の採集を行なった。



第31図 第10号住居址土器 (1:3.1・1:5)



第32図 第10号住居址石器実測図 (1:4.8・1:3)

配 石

調査地区西側、第8号住居址に隣接して検出された。

直径10cm前後の拳大の石から、直径70~80cmの大形の石を配している。配石の規模は、直径4m前後の円形で、さらに配石から北側へ3mほどとびだしている部分がある。このとびだしている部分は、第8号住居址に接しており、第8号住居址が造られた時点に破壊されたことも考えられる。配石の中央部には石はみられない。

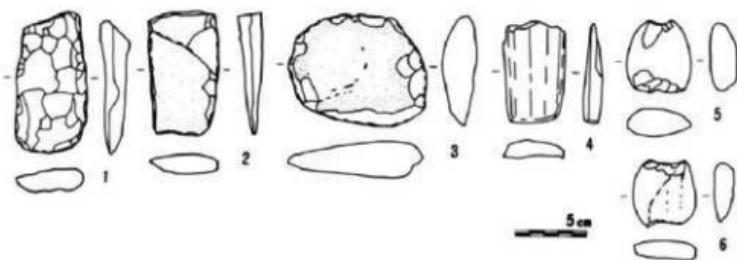
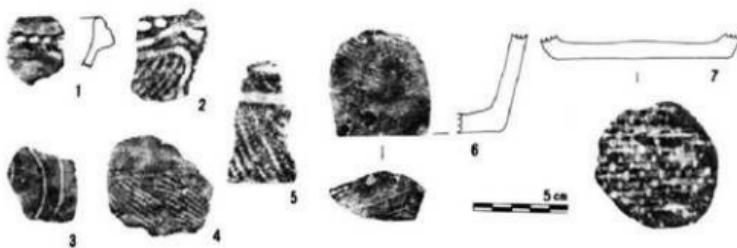
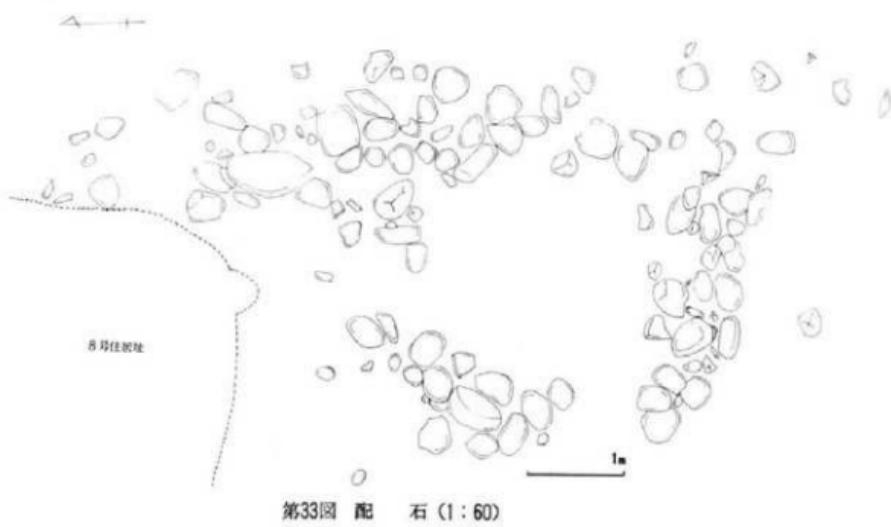
石の財質は、大部分が花崗岩であり、自然石が多い。火を受けたと思われるものもある。

配石は茶褐色土層上部にみられ、遺物も相当数出土している。遺物は縄文時代後期の土器片が多く、また配石の南側、東側からも相当量の後期の遺物が出土している。

配石の時期については、縄文時代後期のものではないかと思われる。



P 8 配 石



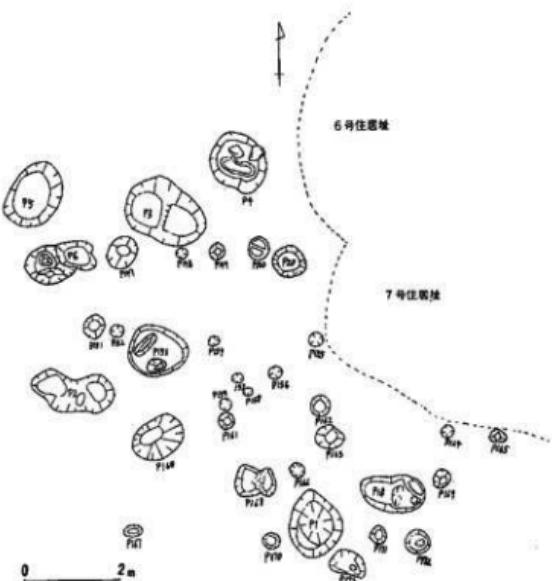
土 壤

調査地区的東側を中心に、住居址に隣接して検出された。

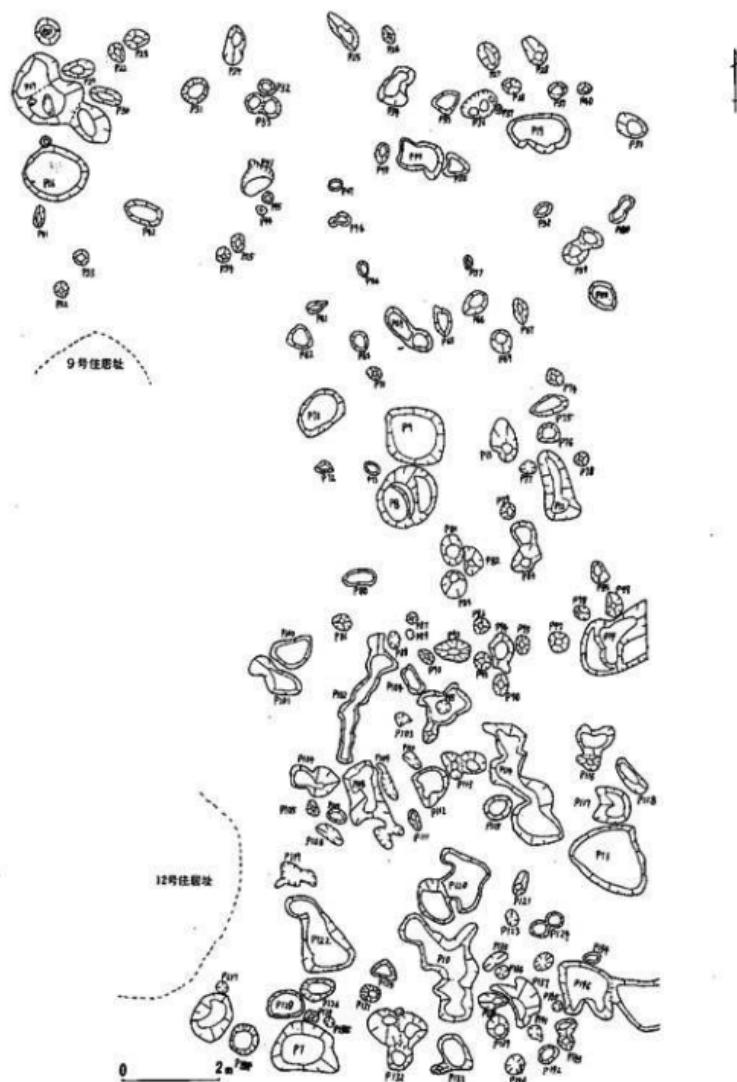
直径約20cm前後の小形のものから、2m前後のものまで、約170箇所みられ、形状も円形、梢円形、不整形とさまざまである。

土壤からの遺物の出土は少なく、焼土、石等もわずかにみられる程度である。出土した遺物は全て縄文時代中期の土器片である。

第1号住居址の北側に位置するP 9・P 13腰土上からは第38図1・2の一括土器が、またP 153からは、第38図3の土器が出土している。



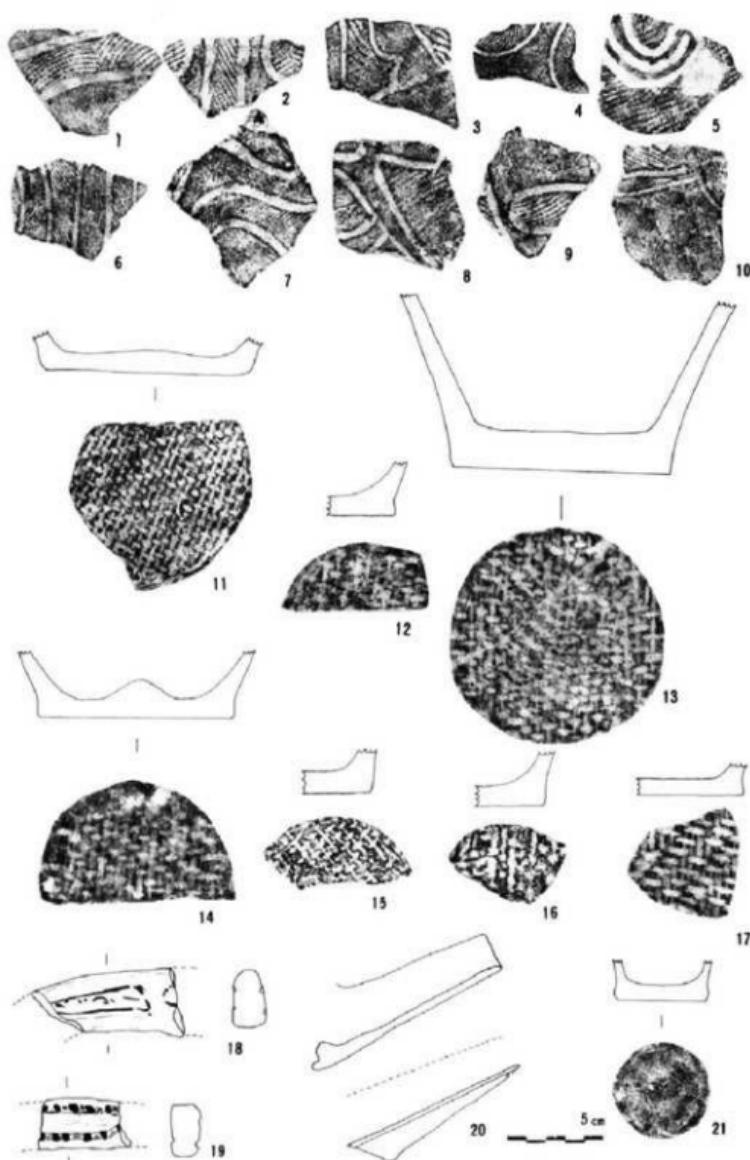
第36図 土壌平面図・南地区 (1:120)



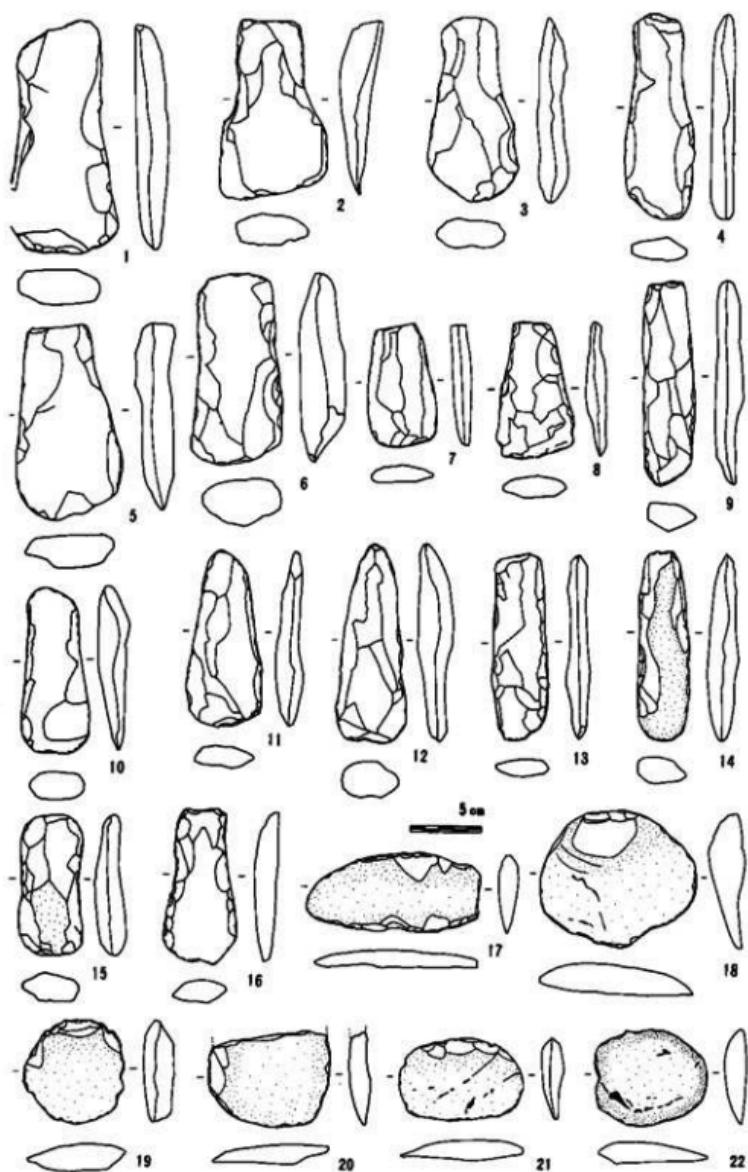
第37図 土壌平面図・北地区 (1:120)



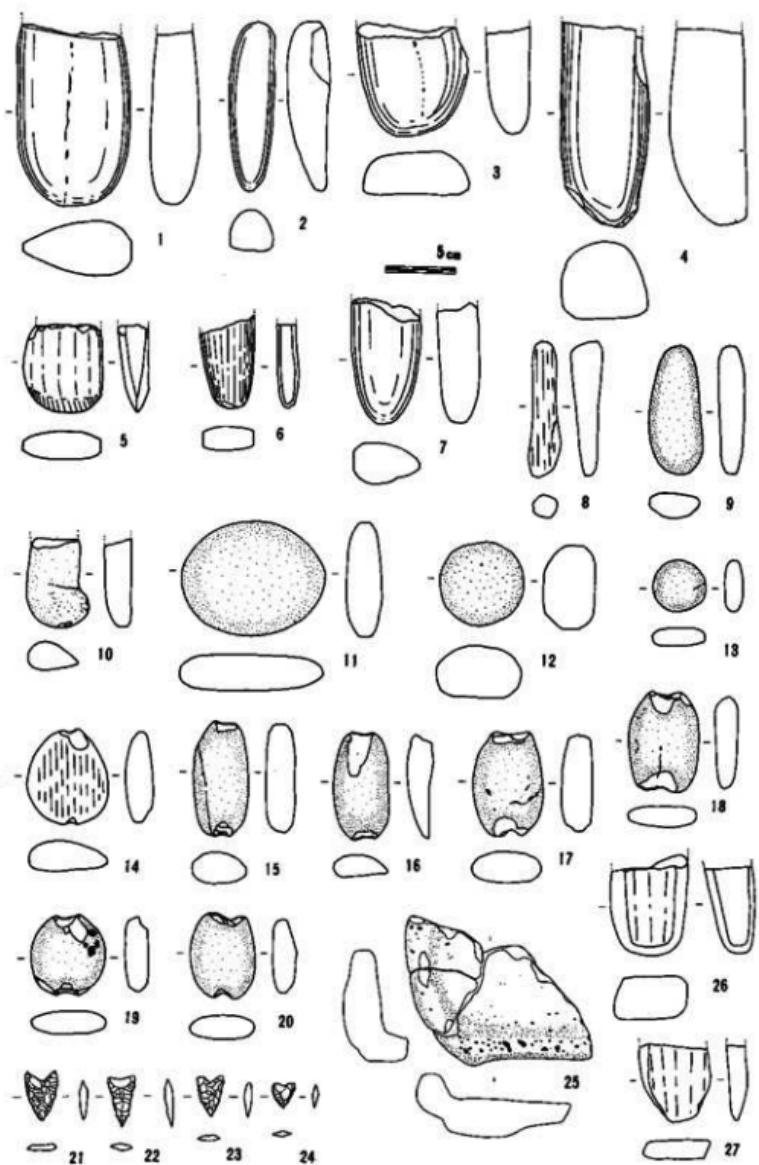
第38図 その他土器 (1~4 1:6, その他1:3)



第39図 その他土器 (1:3)



第40図 その他石器実測図 (1:4)

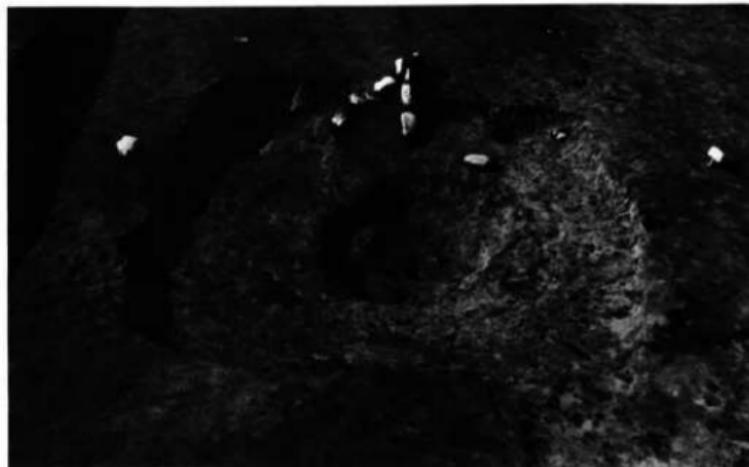


第41図 その他石器実測図 (1:4, 21~24 1:3, 25 1:6)

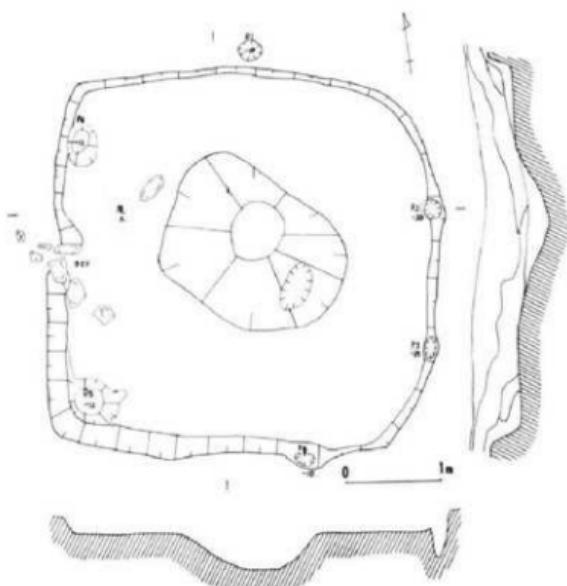
第2節 平安時代の遺構

第1号住居址

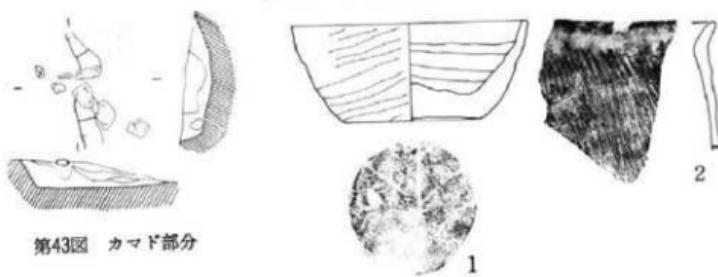
本 坂 位 置	調査地区の最北部に位置している。						
ブ ラ ン	隅 丸 方 形	規 模	南北—4m 東西—4m	主軸方向	東 西		
壁 高	南—35cm 東—20cm	北—25cm 西—20cm	壁の状態	北側、東側は直に近く、南側、西側は傾斜がみられる。			
床	ローム層を掘り込んであり、床面はほぼ平坦になっている。非常に堅緻である。中央部には大きな土壙がある。						
溝	認められない。						
柱 穴	柱穴と思われる穴が6箇所認められた。						
カマドの位置	西 壁 中 央	形 状	石組粘土カマド	規 模	不 明		
壁 外 施 設	確認されない。						
遺物出土状況	比較的少ない。						



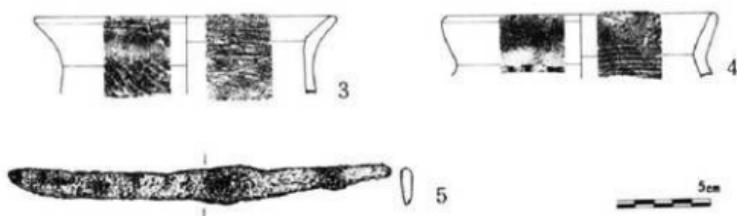
P 9 第1号住居址



第42図 第1号住居址 (1:60)



第43図 カマド部分



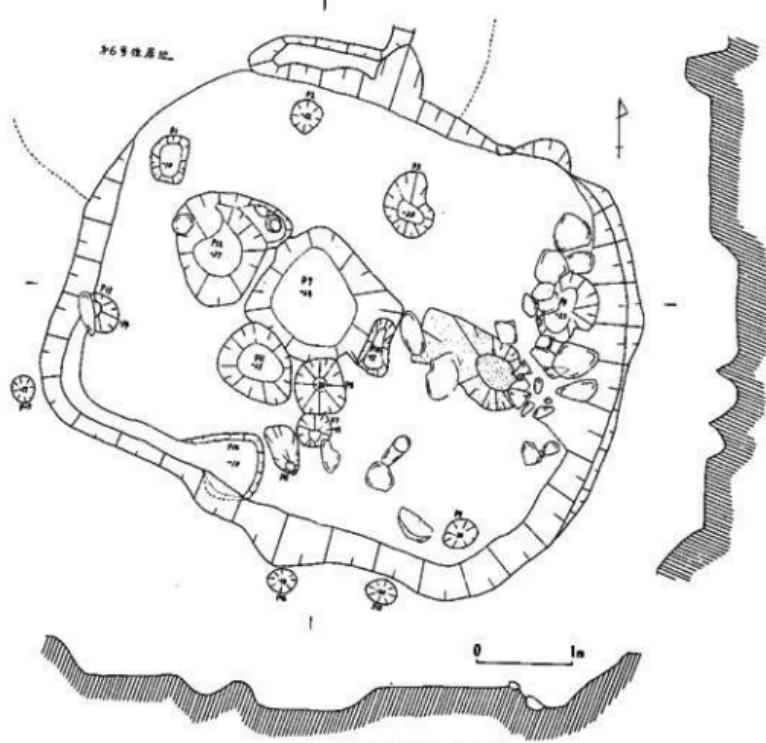
第44図 第1号住居址出土土器・鉄製品 (1:3)

第7号住居址

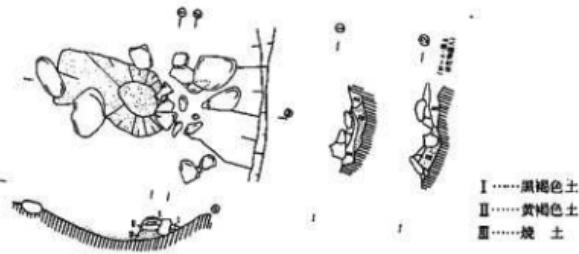
本 坂 位 置	第6号住居址の南で、6号住居址を切っている。						
ブ ラ ン	隅 丸 方 形	規 模	南北-4.8m 東西-6.0m	主軸方向	東 西		
壁 高	南-50cm 東-40cm	北-30cm 西-35cm	壁の状態	傾斜がみられる。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は、平坦で堅緻である。 床面には多くのビットがみられる。						
周 溝	認められない。						
柱 穴	9箇所	主柱穴	P ₁ , P ₃ , P ₄ , P ₆ , P ₈ , P ₁₂ ,	壁外柱穴	3箇所		
カマドの位置	東壁 中央	形 状	石組粘土カマド	規 模	50cm×60cm		
壁 外 施 設	確認されない。						
遺物の出土状況	覆土、床面とも出土量が多い。						



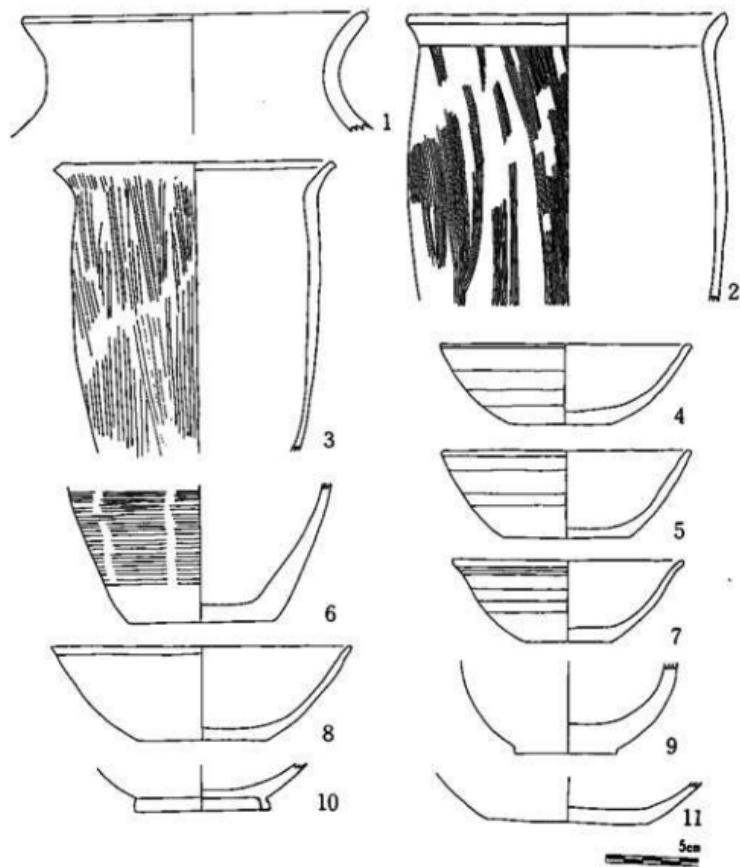
P10 第7号住居址



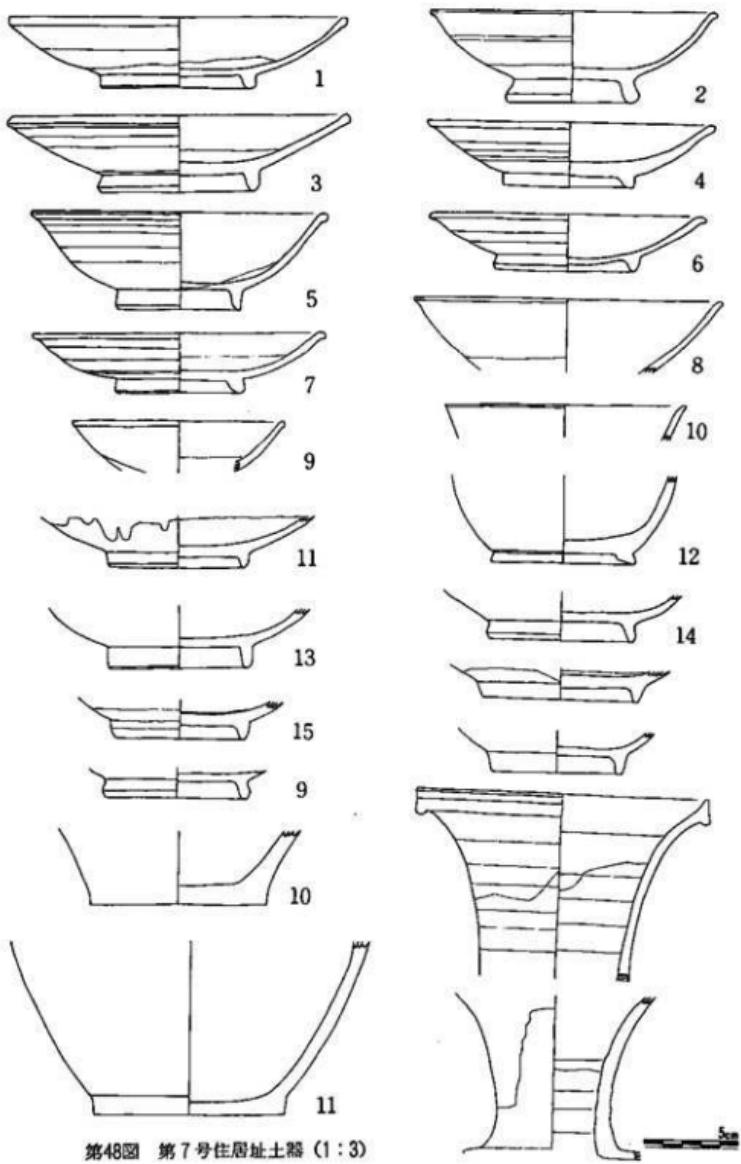
第45図 第7号住居址 (1:60)



第46図 第7号住居址カマド (1:60)



第47図 第7号住居址土器 (1-3)



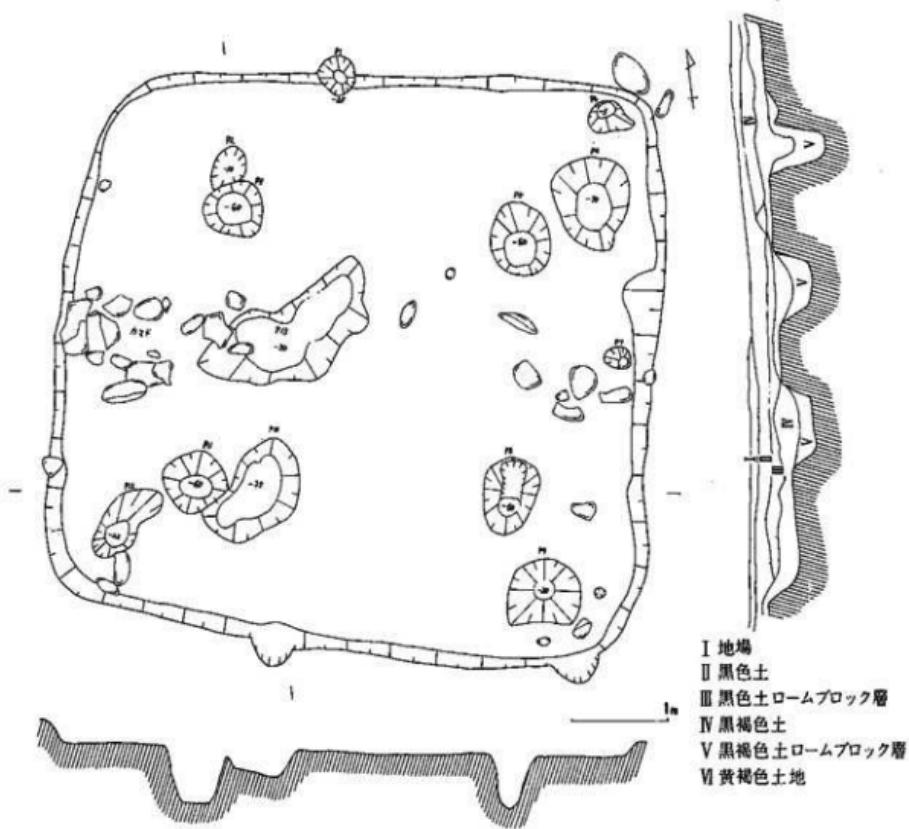
第48図 第7号住居址土器 (1:3)

第8号住居址

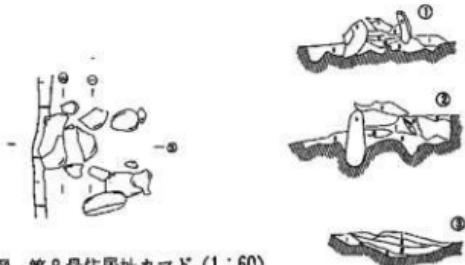
本 坂 位 置	調査地区の南西部の位置する配石に接する。						
ブ ラ ン	圓 丸 方 形	規 模	南北—6.0m 東西—6.2m	主軸方向	東 西		
壁 高	南—34cm 東—18cm	北—14cm 西—23cm	壁の状態	傾斜がみられる。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。床面は平坦である。						
周 溝	認められない。						
柱 穴	4 篙 所	主 柱 穴	P ₅ , P ₆ , P ₈ , P ₁₁ , いずれも深さ約60cmを計る。				
カマドの位置	西 壁 中 央	形 式	石組粘土カマド	規 模	80cm×100cm		
壁 外 施 設	確認されない。						
そ の 他							
遺物出土状況	瓦土、床面とも出土量が多い。						



P11 第8号住居址

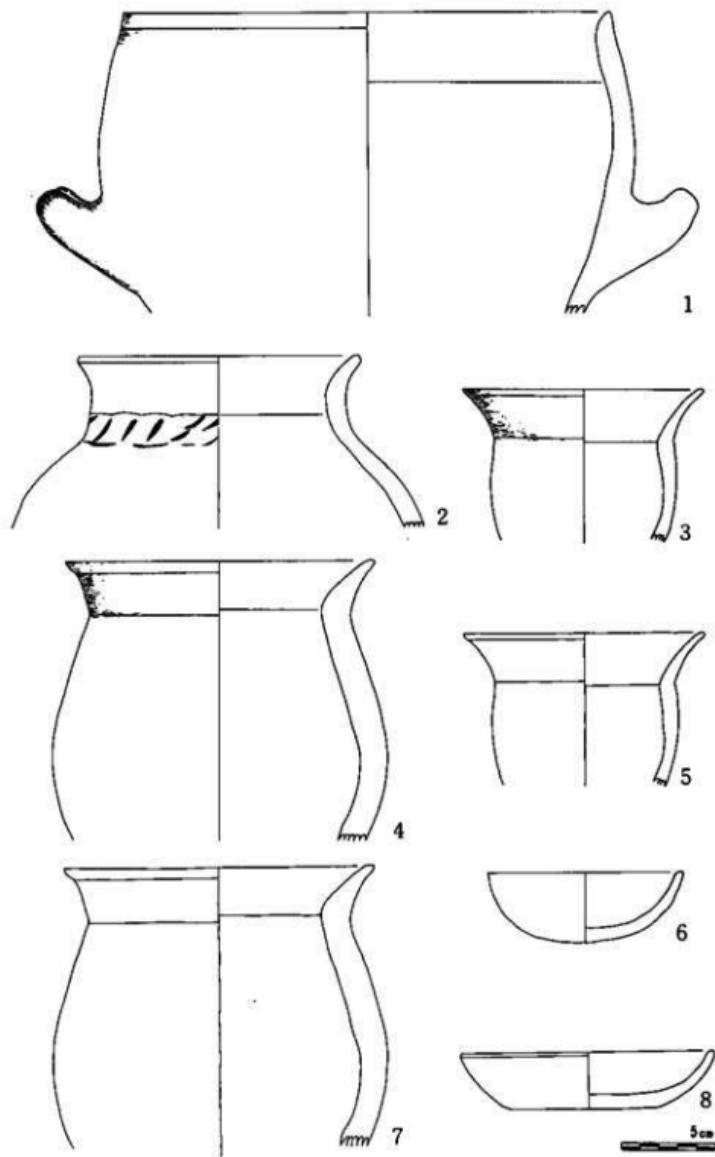


第49図 第8号住居址 (1:60)

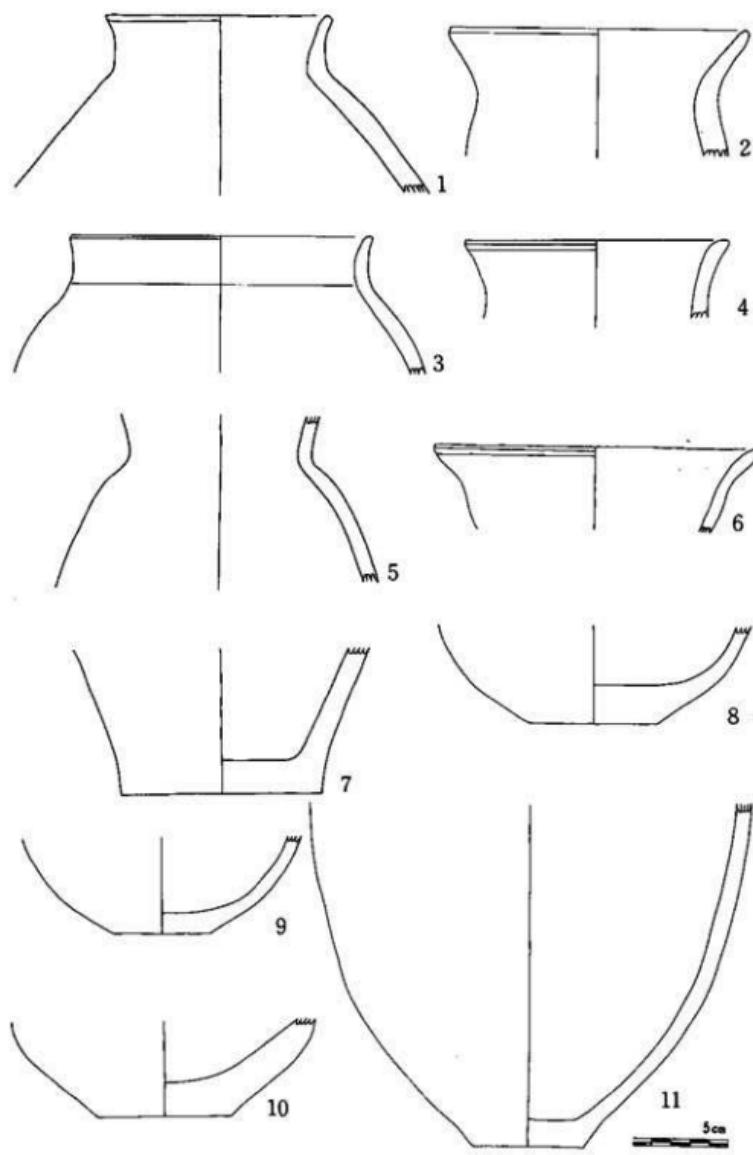


第50図 第8号住居址カマド (1:60)

- I 黒色土
- II 黑褐色土
- III 烧土
- IV ローム



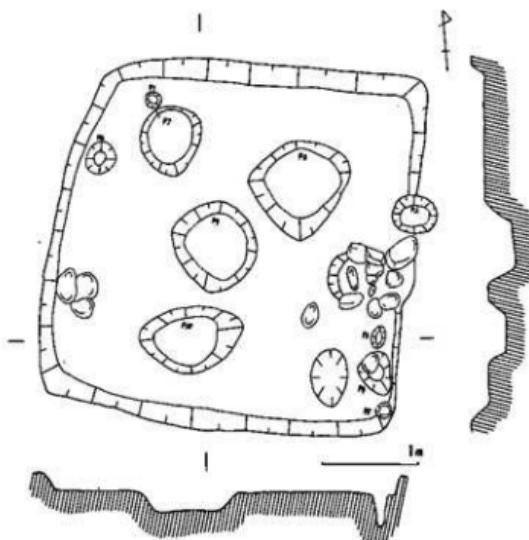
第51図 第8号住居址土器 (1:3)



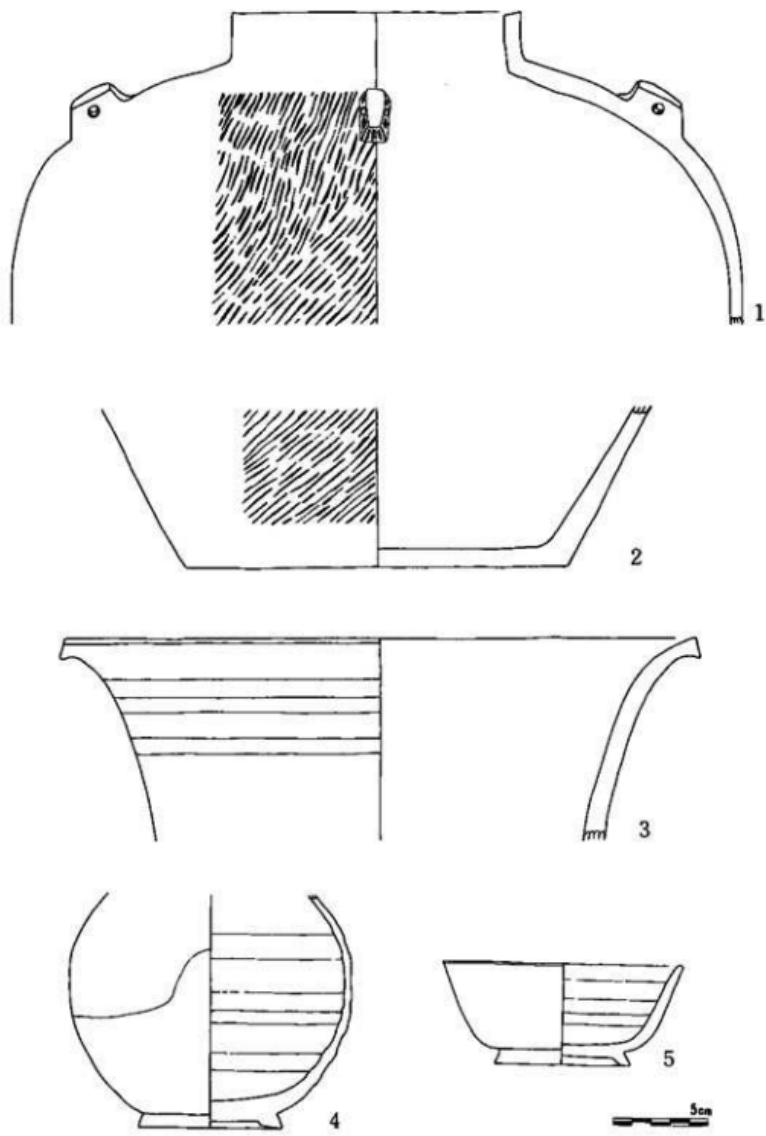
第52図 第8号住居址土器 (1:3)

第13号住居址

本 坂 位 置	調査地区の最南部に位置している。						
ブ ラ ン	方 形	規 模	南北-3.8m 東西-3.8m	主軸方向	東 西		
壁 高	南-20cm 東-20cm	北-15cm 西-20cm	壁の状態	北側、南側は傾斜がみられる。			
床	ローム層を掘り込んで造られており、床面はほぼ平坦になっている。 4箇所に大きな掘り込みがみられる。						
周 囲	認められない。						
柱 穴	P ₁ ～P ₆ は柱穴に關係あると思われる。						
カマドの位置	東 壁 中 央	形 状	石組粘土カマド	規 模	90cm×90cm		
壁 外 施 設	確認されない。						
遺物の出土状況	出土量は多い。						



第53図 第13号住居址 (1:60)



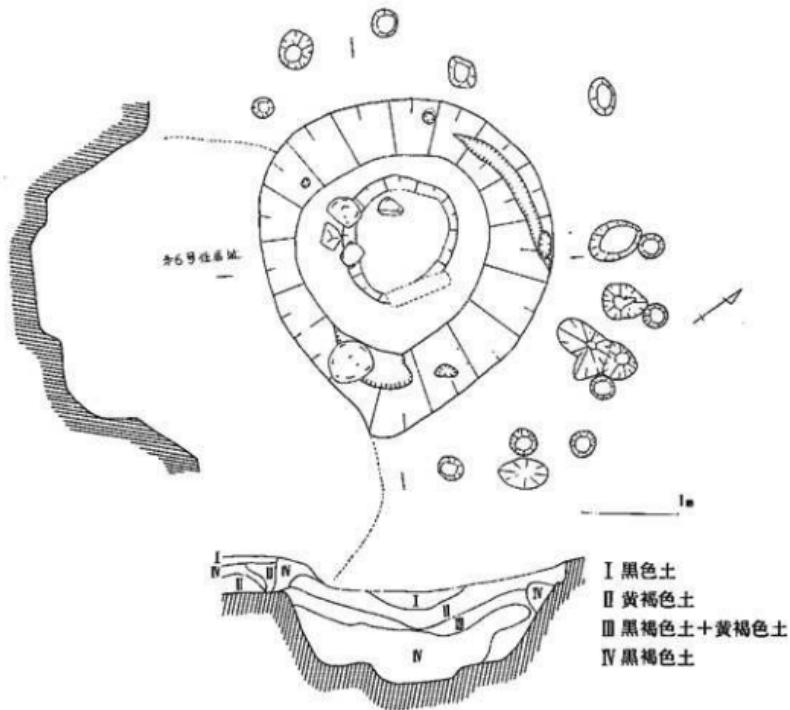
第54図 第13号住居址土器 (1:3)

第3節 その他の遺構

1. 壊 穴

第1号 壊 穴

調査地区の東側に位置し第6号住居址を切って造られている。直径約3mの円形を呈した大形の深いものである。壊穴の底部には、さらに円形の掘り込みがみられる。覆土下層からの遺物の出土はない。



第55図 第1号壊穴 (1:60)

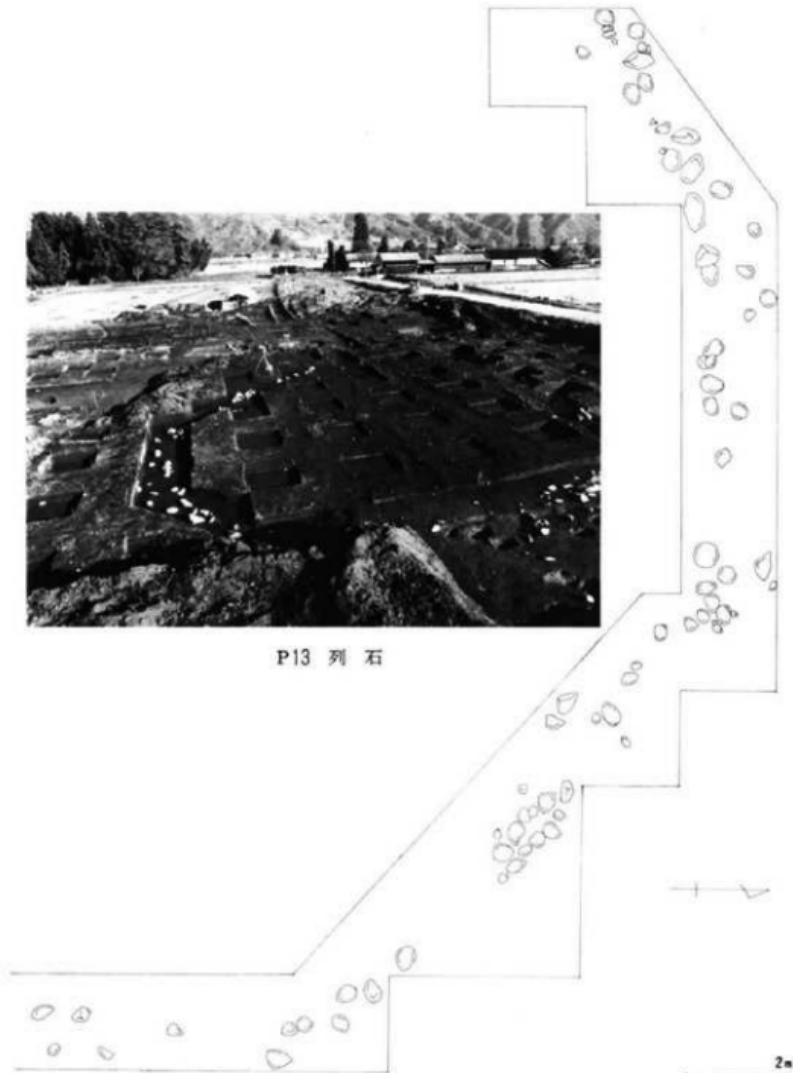
列 石

調査地区のほぼ中央部に位置している。

黒褐色土層上に直径約20cm～70cmの自然石を配している。今回の調査では列石の全容を明らかにするには至らなかったが、円形に配されているようにも思われる。列石内、列石付近からの遺物の出土は少なかったが、列石南側を中心にして縄文時代後期の土器片が多く出土している。



P13 列 石



第56図 列 石 (1:120)

第Ⅳ章 まとめ

室前遺跡の位置する石曾根耕地は、飯島町の中でも古くより集落が営まれた地域である。西岸寺記録をはじめとする古文書等によれば、中世より近世に至るまで現在の飯島地区は石曾根村と呼ばれていた。この様に古い地名をもつ石曾根耕地の集落がどの様に発生しました発達してきたのだろうか、この問題について、今までほとんど研究がなされなかった。

ところが、今年度になり県営は場整備事業の一環として当地域の工事が施行され、工事にさきだち発掘調査が実施された。その結果、原始、古代を中心にして当地域の集落の研究の上で多くのことが明らかになった。

本項では、これらの2～3について述べまとめとしたい。

1. 本調査で住居址が13軒確認された。時期別にみると縄文時代中期が9軒、平安時代が4軒である。縄文時代の住居址については、さほど相違は認められなかつたが、平安時代の住居址については各住居址ごとに相違がみとめられた。住居址の位置については、各住居址とも離れた位置にあった。住居址の規模については、第1号住居址と第13号住居址は、比較的小規模であり、第7号住居址と、第8号住居址は、大規模であった。出土遺物は、第1号住居址は非常に少なく、第7号、8号、13号住居址からは多量に出土した。遺物の種類については、第7号住居址は灰釉陶器、土師器が主で、灰釉陶器の占る割合が多かつた。それに対して第8号住居址は逆に土師器の占る割合が多かつた。また第13号住居址については、土師器、灰釉陶器もみられたが、須恵器の出土量が多かつた。
2. 住居址以外の遺構については、土墳、堅穴、配石、列石がみられた。土墳は、調査地区の東北部に集中してみられた。土墳内の遺物は多くなかつたが、土墳の数箇所からは一括土器が検出された。配石、列石は調査地区的西南部にみられた。いずれも黒褐色土層上に石を配した形態である。黒褐色土層内からは縄文後期の土器片が共存している。黒褐色土層から下は漸移層、ローム層となり、後期の遺物の出土は少なくなる。堅穴については出土遺物もなく、時期、性格とも不明である。
3. 調査地区外についても、過去における道路の開削、水田の造成時に相当量の遺物が出土したとの報告もあり、集落の全体規模については、広範囲に広がっていたものと思われる。終りにあたり、地元、飯島町、飯島町教育委員会、南信土地改良事務所等の熱意ある応援に感謝の意を捧げます。

(調査団長 友野良一・伊藤修)



調査地区（北側）



調査地区（東側）



土塙群及び住居址（北側より）



第一号竪穴

土壤群(東側より)



図版三 土壠群

図版四 出土土器



第4号住



第10号住



第9号住



土壙



圖版五
出土陶器



第7号住



第7号住



第7号住



第7号住



第7号住



第7号住



第7号住



第7号住

圖版六 出土土器・陶器・紡錘車



第8号住



第8号住



第8号住



第8号住



第8号住



第8号住



第13号住

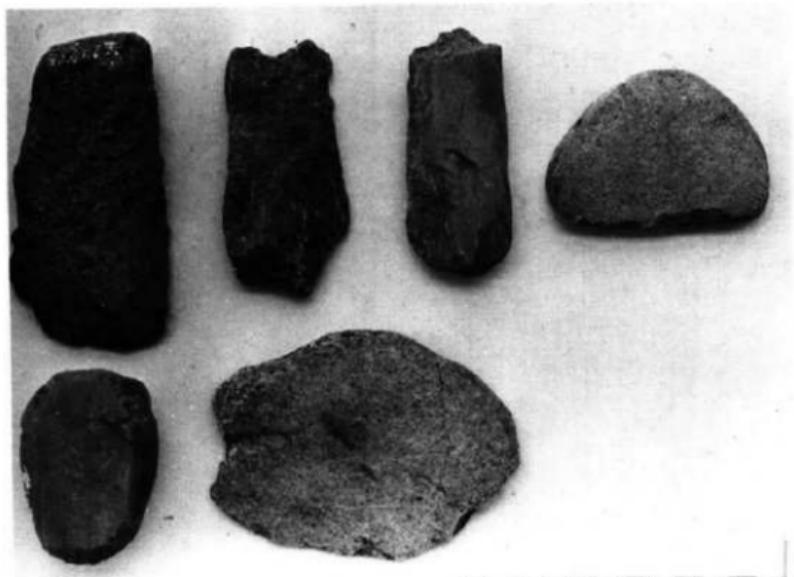


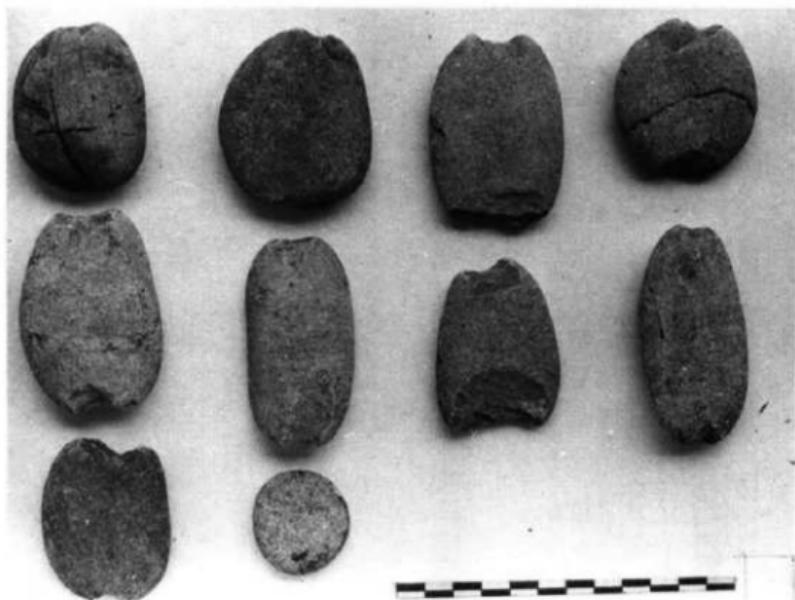
第13号住

図版七 出土石器



圖版八 出土石器





埋蔵文化財緊急発掘調査報告

一 堂 前 一

昭和54年3月20日印刷

昭和54年3月25日発行

発行者

飯島町教育委員会
南信土地改良事務所

印刷者

杉本印刷有限会社